
十七歳の地図

あいぽ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十七歳の地図

【Nコード】

N8051D

【作者名】

あいぽ

【あらすじ】

高校三年生の十七歳の春、三人は出逢った。世の中のことなんか、これっぽちも分からなかった。だけど、この友情だけは永遠だと信じていた。三人の少年たちの友情を描く青春群像！！ 新章『Scrap Alley』始まりました

第0話（前書き）

この作品は、春の競作祭「はじめてのxxx。」への参加作品です。

三人の少年たちの、はじめての友情や恋を、どうか最後まで暖かく見守って下さいますよう、宜しくお願い致します。

あいぽ

第0話

なあ知ってるかい？

俺たちの背中には

翼があるんだ

空高く大きく飛べる翼さ

だけど

いつしか人はみんな

その翼を広げる事すら

出来なくなるんだ

そしてやがて

そんな翼があつた事さえ

忘れちまうんだ

それはまるで

ちっぽけな金にしがみついて

愛や夢さえも

忘れちまったようにね

十七歳の地図

- s e v e n t e e n ' s m a p -

作 あいぼ

第1話 はじまりさえ歌えない(1)

<1>

『美味しい！ 安全！ 明日も食べた〜い！』

軽快なBGMをバックに、ハンバーグを口にしながら、顔をくしやくしやにして笑う幸せそうな子供たちの映像が、渋谷駅のホームにある、小さな蕎麦屋に掛けられた液晶テレビから流れていた。

「大〜きくなれよ〜」

テレビから目を反らし、黙々と蕎麦を食べている赤木英二の横では、そのハンバーグのCMを眺めていた山下順平が、それを真似しながら、おどけて英二の頭をなでていた。

「ばーか。順平、お前も早く食べよ」

英二は、うざそうに順平の手を払うと、食べ終わった蕎麦のどんぶりを両手で抱えて、最後の一滴まで汁を飲んだ。

渋谷駅の構内にある小さな立ち食いの蕎麦屋には、周りにそびえるビルの合間から、暖かい春の日差しが煌めくように差し込んでいた。

「しつつかし、英二。お前んとこの父ちゃんの会社すげえよな。このCM、最近毎日観てるぜ。『丸日食品は、子供たちの明日を守ります！〜』ってか、今や食の一流ブランドだぜ」

「何言ってんだよ」

「オレはさあ、お前がホント羨ましかったよ。一流企業で役員やってる父ちゃんを持つお前がよお」

順平は、蕎麦を食べていた手を休め、大きくため息をついた。

「今まで学校でバカばかりやってきた俺らだけど、お前は、オレと違い、確実に将来を約束されている……」

「何がだよお？」

「だって、いつかは入社できるんだろ、丸日食品に。あゝあ、丸日なんか就職できたら、一生安泰なんだろうな」

英二は、自分の横で目を細める順平の胸元を、拳でぼんと叩く。

「ばか。一流企業に入ったからって幸せなもんか！俺らヤダね。親父みたいな人生を歩くのは。仕事仕事で家にも帰って来ねえアイツのせいで、死んだ母さんはどんなに苦しい思いしてたか……。例え社会から見たら成功者だとしても、俺は誰かを傷つけてまで、成功なんかしたくはねえよつと」

英二は、食べ終わった蕎麦のどんぶりをカウンターの上にあげ、「ごちそうさま」と小さなキッチンにいる老婆に渡した。

「一人の女さえ、幸せにできねえ男なんてサイテーさ」

英二は、そう呟くとブレザーのポケットからタバコを取り出して、口にくわえ火を点けようとす。

「なぐに、知った風な事言ってるのよ、このバカ男。駅の構内は禁煙。そして、あんたは未成年」

くわえていたタバコをいきなり後ろから取り上げられた英二は、驚き振り返ると、そこには、英二らと同じ学校の制服を着た女の子が、両手を腰に当て、仁王立ちをしている姿があった。

「里美ちゃん……!!」

その女の子に気づいた順平は、少し顔を赤くして驚く。

「なんだよテメー。返せよ、里美」

一方、英二は、里美の華奢な腕を掴みタバコを取り返そうとする。

「きゃあ、ヤメテよ。エッチ！」

里美は英二をからかうように、嬉しそうに後ろへ跳ねる。

「英二!! 女の子を幸せにしたいんなら、ちゃんと、自分の進路を決めてからだね。将来が不安定な男についてゆく女の子なんていませんよーだ!!」

里美は、英二に顔を近づけ舌を出し、無邪気に笑う。

「あんた学期末に、進路希望、提出してなかったんだって？ 先生心配してたわよ。偉そうな事言う前に、もっと自分の将来ちゃんと考えたらあ」

そして里美は、人差し指で英二の鼻をはじき、からかうように言い放った。

「うっせーこのブス！ 犯すぞこのヤロー」

里美にからかわれ、少しむっとした英二は、里美のスカートをめくり上げ、里美を抱き寄せようとする。

「きゃあ！ 何すんのよ、童貞のくせに！」

しかし、英二は、里美にその言葉に、思わず動けなくなってしまった。

「……たく、英二に順平！！ いつまでこんなところで、呑気に蕎麦食ってんのよ。もう始業式始まる時間なんだから、さっさと学校に行きなさいよね！！」

まるで勝ち誇ったかのような表情を浮かべる里美は、二人にそう言い放つと、駅のホームを向こうの改札口へと、元気よく走っていった。

「ちくしょー！ 覚えとけよ、里美っ！」

新しい季節のはじまりの朝、ホームを行き交う沢山の人だかりにまじり、両手を振り上げて、悔しそうに叫ぶ英二の前を、暖かな春の風がそつと通り抜けた。

< 2 >

「あゝむしゃくしゃするー！！！！」

蕎麦屋を出た英二と順平は、渋谷駅のホームを、高校がある八チ公口へと歩いていたが、里美にからかわれ怒りがおさまらない英二は、終始イライラしていた。

「いや〜。英二さあ、オレはねえ、ホントにつくづくお前が羨ましいと思うよ」

しかし、そんな英二を横目に、順平はまたため息をついていた。

「なんなんだよ、お前はよお！ 新学期そうそうさつきからため息ばっかつきやがって」

英二は、順平のふくらはぎに、ふざけて小さく蹴りを入れる。

「だってよお、前から思ってたけど、里美ちゃん、絶対お前の事好きだぜ」

「……ああ〜!?!」

英二は、立ち止まり、自分より背の高い順平を見上げる。

「あんな口うるせ ヤツに好かれても嬉しくともなんともねえよっ！ 俺は、こお……、もっと大人っぽい女が好きなんだ!!」

「何が口うるさいんだよ！ 試験前は、いつもオレらにノート見せてくれたり、さつきだって、お前の事心配してくれたり……、優しい子じゃねえか」

順平は、まるで英二を諭すかのように語りだす。しかし英二は、

そんな順平の話を、まるで聞く耳も持たないかのように一掃する。

「……………興味ないね」

「ホントか…………？」

「……………ああホントだ」

ホームを行き交う人々から見れば、くだらない事を話しているかのように見えるが、二人は、人混みの中で、真剣に互いを見つめ合い話していた。

そして、英二の気持ちが分かった順平は、ほっと安心したような笑顔をもらし、英二と互いの拳をぽんと叩き合った。

すると、なんだか可笑しくなった二人は、見つめ合ったまま、はにかんだように微笑んだ。

「あゝあつ！ もう高校生活も最後だったのによお、なんか面白見え事ねえかなあー！！」

英二は、のけぞるように、後ろに大きく大きく背を伸ばした時だった。

英二の視界に、自分たちと同じ制服を着た男子生徒が、何やらもめている様子が映った。

「おい、順平。アイツ……………去年まで、俺らと一緒にのクラスだったヤツじゃねえか」

「……………ん！？ おおつ、アイツは優等生のメガネくんじゃねえか」

「…………だろ」

「ああ…………」

英二と順平は、目を合わせ、にやつと微笑んだ。

「面白れえ事見つけたあ……………！！」

< 3 >

「…………で、君の名前は？ それから住所と電話番号も教えなさい。あつ、一応本人確認するから学生証も見せるんだよ」

駅ホームの片隅では、ホームに差し込む朝の日差しが眩しいのか、一人の駅員が少し目をかすめながら、英二らと同じ制服を着た生徒に対して、少し偉そうな口調で何やら問いつめていた。

「ぼ、僕は…………」

そして、その生徒は、自分に詰め寄る駅員に対して、鞆を両手で握りしめたまま、先程からずっとおどおどしていた。

「君ねえ、さつきから黙ってばかりじゃ困るんだよ。朝のラッシュで、僕も忙しいんだからね。さっさと学生証見せなさい！ なんなら、今から警察呼ぶよ」

「けっ…………、警察う！？」

その生徒は、『警察』という言葉に、ピクンと身体を反応させ、

額から流れる汗を必死にぬぐった。

「だって、君は、車内で、この子のお尻触ってたんだろ！ それは、『痴漢』と言って犯罪なの……！！」

呆れたような口調で生徒に話す駅員は、どこか投げやりで面倒くさそうな感じだった。

そして、その横では、痴漢をされたと訴えていた20代前半くらいの女性が、冷やかな眼差しで、その生徒を見つめていた。

「さ……、触ってなんかいません！」

しかし、その生徒は、精一杯の勇気を振り絞り、駅員と女性に自分の無実を訴える。

「駅員さん、……彼、そうは言うけど、駅員さんも見たでしょ。私がおその子を捕まえた時、確かに彼の股間は膨らんでたわよね。」

「こ、ここの股間　！？」

いくらかこう言う状況であつたとしても、まだ若いキレイな顔立ちの女性から出たその言葉に、中年の駅員は思わず反応してしまう。

「き。きき君は何かい！？ 朝からこんなキレイなお嬢さんのお尻をなでまわした拳句、アソコを、ぼ……ぼぼ勃起させてたのかっ！！」

少し興奮気味に話す駅員は、その生徒ではなく、横にいる女性のお尻をなでまわすように見つめながら話していた。

「ち、違う。電車だ！ 電車が揺れたせいで、その人とぶつかったんだ！ 触ってなんかいない！」

生徒は、目には涙をため、泣きそうになりながら女性に訴える。

「じゃあ何かい！ 君は、こ……、このお嬢さんとぶつかったただけで、勃起したって言うのか！？ 一体どんな風に、このお嬢さんのどこにぶつかったんだ！？」

さっきの若い女性からの言葉で、駅員は性的な興奮を覚えたのか、その生徒に注意する事なんかすっかり忘れ、横にいるスラリとスタイルの良いその女性の身体を上から下まで見つめて、勃起の原因を必死に追求しようとしていた。すると、そんな時だった。

「さっきからエロいんだよ！ おっさん」

「彼……、触ってないって言ってんじゃん」

誰かに肩を思いつきり引つ張られた興奮状態の駅員が、後ろを振り返ると、そこには、鋭い眼差しで自分を睨みつける英二と、隣にいる女性に、優しい笑顔を向ける順平がいた。

「な……、なanan何だお前たちはあ！？ けけ警察呼ぶぞ
！」

英二に睨まれた駅員は、ますますヒステリックに声を張り上げる。一方で、痴漢の疑いをかけられていた生徒は、突然現れた二人にただ呆然と目を丸くしていた。

「あなた達には、関係ない話なの……。邪魔しないで」

しかし、女性の方は、少しため息をもらしながらも、あくまでも冷静に、英二と順平に話しをする。すると、さっきまで駅員を睨みつけていた英二は、視線をその女性に移し、少しはにかんだように彼女に微笑んだ。

「関係ねえだと……。んな事ねーよ。だってコイツは……」

「俺たちの『トモダチ』だからよう!!」

そして、英二と順平の二人は口を揃え、堂々とその女性と駅員に言い放ったのだ。

その言葉に、一瞬、その場が静まりかえり少しの沈黙ができた。英二と順平を睨いて、もともと居合わせた三人は、英二らの言葉に啞然としてしまったのだ。すると、さっきまで痴漢の疑いをかけられていた生徒は、この場から逃げられるチャンスだと思ったのか、なんとその隙に、いきなり改札口の方へと思いつき走り出した。

「あつ、ちょ……オイ待て! この勃起男!!」

「……っか、オレらも始業式始まつちまうんで行くぞ、英二!!」

突然の逃走に驚いた英二と順平だったが、時計を見ると、始業式まであと数分だったため、逃げ出した生徒の後を追いつき、二人も勢いよく走り出した。

「トモダチかあ……」

一方、痴漢の疑いをかけていた女性は、英二らのその言葉に、思わず過去の自分の甘酸っぱい記憶でも辿ってしまったのか、優しい微笑みを浮かべながら、走り出す英二らをじっと見つめた。そして春の空をそつと見上げて、大きく深呼吸した後、駅員に軽く会釈すると、ベージュのトレンチコートの襟を立て、まるで何事もなかったかのように、英二らと反対方向にさつそうと歩いていった。

「あれっ、ちよっ……、お嬢さん。ままだ話かああ。その時、あの痴漢は、どんな風にあなたにぶつかったんですか？」

「……イヤ、それよりきき君たちだ！ 待つんだ！ 止まれっ！ 止まらないかっ！」

そして、最後に一人取り残された駅員は、逃げ出す英二らを、ホームの人混みを必死に掻き分け追いかけた。

しかし、英二は、ヒステリックに追いかけてくる駅員に向かい、振り返ると、精一杯の大きな声を張り上げた。

「待てつても、止まってなんかいられつかよお！ 俺たちは、ただ……走り続ける事しかできねえんだからさあっ！！！」

春の日差しを身体いっぱいに浴び、まるで背中に大きな翼を広げたかのように、拳を突き上げ思いつきり空高くジャンプした英二の声は、渋谷駅のホームを爽やかに駆け抜けた。

これから世の中で……
一体どんな風に

生きてゆけばいいのかなんか
あの頃の俺には
よく分かんなかった
けどさあ
手を伸ばせば
何か大切なもんが見つかる気がして
ただいつも
突っ走ってたんだ
それが……
社会の中ではまだ
はじまりさえ歌えない
俺たちだった

第2話 はじまりさえ歌えない(2)

< 1 >

暖かな日差しが、行き交う人々を優しく包み込んでいる、ある春の日の朝、渋谷駅のホームの片隅にある蕎麦屋では、今朝も、英二と順平が、学校へ行く前に蕎麦を食べていた。

「白……んゝいや、ベージュかな……！？ くうゝストライプも入ってる気がするしなあ」

カウンターに向かい必死に蕎麦を流し込む英二の横で、先程から両手にどんぶりを抱えた順平は、カウンターに持たれかかり、向かい側のホームを、ぼーっと眺めていた。

「おい順平、お前、ナニ独りでブツブツ言いつてんだよ。ちゃんと見張ってんのか！？」

英二は、そう言つと、手にしていた割り箸を順平の顔に向ける。

「……っゝか、違うんだよ、英二。ほら、あれ見てみるよ。あつちのホームにしゃがんでる女の子ら、もう少しでパンツが見えそうなんだよ」

「ばーか。お前、パンツなんか見てねえで、ちゃんと見張っててくれよ」

眉間にシワを寄せながら、向こう側のホームをじっと見つめる順平に、英二は蕎麦を食べていた手を一旦休め、少し口を尖らせる。

しかし、そんな英二に対し順平は、あくまでも向かいのホームから目線を動かさず、英二に話し始めた。

「ばかはお前だよ、英二。何考えてるか知らねえが、今朝でもう七日目だぜ。こんなに人が多い渋谷だ。もう出逢えこねえって」

「分かってるさ！！……んな事。ただ、なんとなくだ。そう、なんとなく。もっかい出逢えたら、運命かな？なんて。だって、凄くねえ？もし、また出逢えたとしたら、それこそこんなに人が多い渋谷で、二回も偶然出逢えた事になんだぜ！！」

「……まあ、出逢えたらの話だな」

真っ直ぐに向かいのホームを見つめたまま、コホンとワザとらしく咳き込む順平を、英二は少し睨み付けた。

「……なんだよ！！　順平、なんか言いたい事あんなら、言えよ！！」

「……特に言いたい事はないが、ただ……」

「ただ……なんだよ！？」

さっきから、自分を理解してくれようとしないうちに順平に対して、英二は苛つきを隠せず、思わず突っかかってしまう。しかし、そんな英二に対して、順平は冷静に問いかける。

「惚れたのか、英二？」

「……ああ惚れたさ。悪りいか？　順平」

「英二、お前……、前々から言おうと思っていたが……」

「なんだよ？」

真剣な表情を見せる英二に対して、順平は、向かいのホームから目をそらし、やっと英二の目を見つめる。

「英二……、お前、ホントに果てしないほどバカだよな」

そして、英二にそう言った順平は、堪えていた笑いを、ついに耐えられなくなり、英二を指差しながら、大声で大爆笑しはじめた。眉毛をハの字に倒して笑い続ける順平のその目には、笑いすぎて涙が滲んでいた。

「ナニが惚れただよ！ 英二、お前、自分で言ってる事分かってんの！？ 一回すれ違った程度のどこの誰とも分かんねえ女に惚れるか、フツー！？ ははは……はははは！！」

ことの発端は、先日 of 始業式の日の朝の痴漢騒動だった。

あの後、英二は、痴漢されたと訴えていた二十歳くらいの女性が、どうしても気になると言いはじめ、あの日以来、今日でもうかれこれ七日間ずっと、毎朝のようにここの蕎麦屋で順平と一緒に、その女性がもう一度通りかかるのを待っていたのだ。そして、そんな馬鹿げた英二の行動に、呆れながらも付き合っていた順平は、英二が真剣な表情で「その女に惚れた」という言葉に、堪えていた笑いがついに抑えきれなくなり、涙を流しながら大爆笑しはじめたのだ。

「順平！！ お前には分かんねんだよ、あのヒトの事が！ あのヒトは、そう……なんかこぉ、寂しさ！？ そう、寂しさだ！ あのヒトは、瞳の奥に、誰にも気づかれねえように寂しさをしまい込んでたんだ。そして、その寂しさに俺は気づいちまったんだよ。だから、俺が……、俺がああのヒトの寂しさを救ってやんねえといけねえんだ！ 絶対俺は、あのヒトを幸せにしてやるんだ」

「なにが、俺がああのヒトを救ってやるだよ……。救ってやりてえのは、お前の頭ん中だぜ」

しかし、ため息をつく順平に対し、両手を握り締め、真っ直ぐに順平の目を見据えて話す英二の目は真剣そのものだった。そこで、順平は、そんな英二に、半ば呆れながらも右の拳を突き出す。

「わぁゝったよ！ 付き合うよ！ お前にみたいなの、超がつききれない程の大馬鹿男に付き合えんのは、昔っからオレだけだもんね。ただし、お前、期限を決めろ。いつまでもダラダラと、そんな訳のわかんねえ女待ってても、お前のタメにはならねえよ。いいか、今日でちょうど七日目だから、今日までだ。オレたちは、もう一週間待ったんだ。今日の夕方までに再会できなきゃ、お前も男だったらきっぱりあきらめろ！！」

さっきまでのおどけた表情とは違い、自分をまっすぐと見つめる順平に対して、英二は、少し考えた後うなずいた。

「……オツケー順平！ 約束だ。俺はきつと逢ってみせるぜ」

唇を少し斜めに上げ自信たっぷりに微笑む英二は、順平の目を見据え、順平から出された拳を、自分の拳でポンと叩いた。

そんな時だった。いきなり順平が興奮気味に大きな声を出して叫

び出した。

「あああああ！ オイ英二いいい！ 見ろよ、見ろよ、見ろよ
！！」

「ああゝ？」

英二は身を乗り出し、順平が指差す方を見ると、なんと順平がさつきまで見ていた向かいのホームでしゃがんでいた女の子たちの一人が、ちよつと動いたせいで角度が変わり、英二と順平からは、はっきりとパンツがまる見えになったのだ。

「うああおおおお！ 黄色だぜ ! 喜べ、英二！ オレたちの未来はきつと、あの黄色いパンツのように明るいんだ！」

順平は、ガッツポーズをして天を仰ぎ、抑え切れない感情を身体いっぱい表現していた。

そして、そんな順平に対し、今度は英二が呆れながらため息をつく。

「……順平、お前、溜まりすぎなんじゃねえの？」

「バカヤロ！ 一日三回のオナニーはオレの日課だぜ！」

「何い！？ お前つ……、一日にそんなにしてんのか！？」

驚く英二に対して、順平は腕を組み、自信に満ち溢れた表情で、ただ豪快に笑っていた。英二は、そんな順平を見て、ため息まじりに言う。

「順平、お前……、ボクシングで頭殴られすぎて、頭ん中、白いおたまじゃくしに侵されてんじゃないか!?」

そして英二は、おどけて順平の頭にワンツーパーンチをくりだした。すると、将来はプロボクサーを目指しているだけあって、順平はタントんと足をリズムミカルに動かし、英二のパンチを軽く避けて、二人のじゃれあいが始まった。

「うっせー、英二！ この時代遅れの純愛男がつー!!」

「バカヤロウ、お前みてえなイカ臭い男に言われたかねえよ!!」

二人は、渋谷駅のホームの人混みも気にせず、ボクシングの真似事をしながら、時間も気にせず夢中になり、遊びはじめた。

「なぐに、朝からまた馬鹿な事やってんのよ、あんた達は!!」

突然に、後ろから頭をはたかれた英二と順平が振り返ると、里美が無邪気な笑顔を浮かべ笑っていた。

「あ……、おはよう里美ちゃん。また一緒のクラスになったね」

里美に気づいた順平は、英二とじゃれあうのを止め、里美の方に身体を向け、真っ赤にした顔をうつむけながら挨拶をする。

「うん、そうだね。順平!! また、この馬鹿男も一緒だけどね……」

里美は、英二の方を向いて、嬉しそうにあっかんべーをする。

「うつせーよ里美！ 順平、ほらっ今夜のおかずだあゝ！！」

すると英二は、笑いながら、里美のスカートを思いっきりめくり上げ、ホームを改札口へと走りだした。視界に、里美の真っ白なパンツが飛び込んできた順平は、声にならない声をあげ、思わずその場に固まってしまう。

「ちよつ、英二 ツ！ 待ちなさい！ あんたねえ……！！」

「バーカ、里美、こない俺を馬鹿にした仕返しだあゝ！！」

渋谷駅のホームには、今朝も英二たちの無邪気な声が響いていた。

恋って一体なんなんだろうな……！！？

世界中の人たちが

例えばハラを抱えて笑ったとしても

名も知らぬあのヒトへの恋は

俺の心の中の真っ白の地図を

ゆっくり彩りはじめたんだ

第3話 存在（1）

< 1 >

「よい、はじめ！」

英二らが通う私立南青山学院高校の、特進クラスでは、大学受験に向け模擬試験が行われていた。

三十名ほどが集まる、緊張の貼りつめた静かな教室は、試験監督の教師の合図が響き渡ったと同時に、生徒たちが鉛筆を走らす無機質な音で一斉に包み込まれた。

午前八時から始まったこの模擬試験は、すでに二科目のテストを終了し、午前中最後の科目の英語のテストを向かえていた。

そして、その教室の中には、先日の痴漢騒動で英二らから救われた男子生徒、水野拓巳の姿もあった。
ミスノタクミ

東京都内の中でも、偏差値的には、中の上に位置する、南青山学院高校では、毎年僅かながらも、現役での東大合格者を輩出しており、三年生になるとークラスだけ設置される、この特進クラスの三十名の生徒たちは、『目指せ東大合格！』を合言葉に、受験戦争の中を必死に勝ち抜こうとしていたのである。

将来はプロボクサーを目指す順平や、卒業後の進路を決めてすらない英二とは違い、この特進クラスの生徒たちは、寝る暇も惜しむ程の勉強漬けの毎日だった。

必死に机に向かい、鉛筆を走らす生徒たちの中で、拓巳の様子に異変が起きたのは、試験開始から、四十分を過ぎたところだった。

ひとつひとつ調子よく問題を解いていた拓巳だったが、難問に差しかった時、途中でふと机から顔を上げたのだ。

するとその時、拓巳の視界に、前を座る女子生徒の背中が映った。しかも、その女子生徒は、模試を受験する生徒たちの熱気で教室の中が暑かったのか、ブレザーを脱いでいたため、拓巳の視界には、彼女が背中を丸めて机に向かう度に、白いブラウスから、うっすらとブラジャーの線が見え隠れするのが飛び込んでくるのだ。

拓巳は、自分の前に座る女子生徒の、白いブラウスから浮かび上がる、淡い水色をしたブラジャーの色や立体的な形に、思わず釘づけになってしまった。

身体中の血が全身をドクドクと大きな音を立てて駆け巡っているかのような感覚に支配された拓巳は、自分の意思とは関係なく、気がつけば、股間が大きく大きく膨らんでしまっていた。

そして、次第に顔中が熱を帯びたように火照ってきた拓巳は、たまらなくなり、誰にも気づかれないうちに、そっと右手をポケットに忍ばせ動かし始めた。

< 2 >

「あゝっ、順平、お前、そのカレーパン俺のだから、絶対え食うなよ！」

「ちょ…ッ、バカ英二！　ちゃんと順平と分けなきゃダメでしょ。」

ナニ独り占めしようとしてんのよ!!」

午前中の授業の終了のチャイムが鳴ったと同時に、英二、順平、里美の三人は、里美が買ってきた幾つかのパンと牛乳を抱え、屋上に向かう階段を駆け上っていた。

「そうだ、そうだ、バカ英二！ お前は、駅の蕎麦でも食って、一生ストーカーでもしとけ!!」

順平は、真っ先に階段を駆け上がっていた英二を追い越し、英二の肩をポンと押す。すると、それを一番後ろで聞いていた里美は、弾むように一段飛ばしで階段を上がり、順平の横に並び、英二に作り笑顔を投げかける。

「へ〜！ 英二、あんた好きな人なんかいるんだ？」

里美は、両足を思いっきり広げ、腕を組んで仁王立ちで英二を見下ろした。

「里美ちゃん、好きな人とかってゆうレベルじゃないべ、コイツはただのストーカーなんだから」

そして、そんな里美の横では、英二を指差しながら豪快に笑い出す順平がいた。

「な〜んだ。つまんないの!」

「うつせーよ、お前ら」

順平の言葉を聞いて、ほっとしたように無邪気な笑顔を浮かべる

里美とは対象的に、英二は、独り取り残された踊り場で、ポケットに両手を突っ込み、少し斜に構えて順平と里美を見上げていた。

屋上の扉の窓から差し込む眩しい程の太陽の光は、三人をまっすぐと照らし、それぞれの影を長く映し出した。

「なぐに寂しそうに呟やいてんだよ、英二。今日中には、また再会できる自信があんだろ。早く上がって来いよ」

少し寂しそうにする英二に気付いたのか、順平は、英二に優しく笑いかけ、屋上の扉に手をかけた。

< 3 >

校舎の屋上は、一歩足を踏み入れると、グラウンドを美しく彩る満開の桜の香りを、春の暖かな風が運び込み、優しい桜の香りで溢れていた。

「気持ちいいー!!」

里美は、桜香る春の風に髪がさらわれないように、額に右手を添えながら、満面の笑みを浮かべ、屋上を見渡していた。

「ホントに……春の日の屋上って、気持ちがいいよなあ」

「ああ、こつから、こつやって空を眺めると、イヤな事なんてなぐんにも忘れちまいそうだぜ。」

気がつけば、英二たちは、三人横並びになり、春の爽やかな空に両手を伸ばし、大きく伸びをしていた。

すると、そんな時だった。何気なく、屋上のフェンスに目をやった順平が、眉間にシワを寄せ英二に呟いた。

「……おい、英二。あそこに、誰か立ってねえか？」

「ああー！？」

順平が指差す方向に、英二もゆっくり目線を合わせてゆくと、確かに屋上のフェンス近くに、何やら人影が動いているのが英二にも見えるのだ。

「……おい、あれ、フェンス乗り越えちゃってねえか……？」

英二は、順平に顔を寄せ呟く。

「ああ……、乗り越えちゃってるね、あのヒト」

順平は、英二の目を見つめた後、二人は恐る恐るフェンスの方へ近づいた。

すると、フェンスを乗り越えた向こう側で、何やら誰かがしゃがみ込んでいる姿が、二人の視界に入ってきた。思わず、息を飲んだ英二と順平は、顔を合わせ、驚きのあまり声を上げた。

「アイツは……、こないだの勃起男！？」

なんと、屋上のフェンスの向こう側では、小さくしゃがみ込んだ

拓巳が、身体をぶるぶると震わせていたのだ。

第4話 存在(2)

< 1 >

「あいつは……、こないだの勃起男 ！？」

英二と順平が、顔を見合わせ驚く声が、屋上に響く。

二人の視線の先には、屋上のフェンスを乗り越え、僅か六十センチくらいの足場にしゃがみ込み、小さな身体をぶるぶると震わす拓巳の姿があった。もしも、一步でも足を踏み出せば、まっさかさまに下に落ちてしまいそうな場所に拓巳はいたのだ。

「私、先生呼んでくる！！」

今にも屋上から落ちてしまいそうな拓巳の姿に気づいた里美は、悲鳴にも似た声を上げ、足早に屋上をあとにした。

「お い ！ 勃起男、お前そこでナニやってんだ！？」

「痴漢の次は、自殺かあ？ 危なねえから、早くこっちに帰って来
い」

一步一步拓巳に近づきながら投げかける言葉は、いつものようにおどけている英二と順平だが、今にも屋上から落ちてしまいそうな拓巳の姿に動揺を隠せない。二人の額は、じわりとイヤな汗で湿ってきていた。

さっきまでは心地よかった春の風も、今は、まるで小さな拓巳の

身体を屋上から落とそうとしているようで、春の風が屋上を通り抜ける度に、英二と順平は心臓の止まる思いがした。

「来るな ！！ 僕に近づいたら飛び降りるぞ！！」

瞬間、拓巳は立ち上がり、掴んでいたフェンスから手を離そうとする。

「ナニやってんだ、お前え！！」

英二は、拓巳を睨みつけるような眼差しで、拓巳がいるフェンスまで駆けてゆく。

「来るなと言っただろ！ 本当に飛び降りるぞ！」

しかし、その言葉とは裏腹に、狭い足場に立ち上がり怖くなったのか、拓巳は、フェンスにしがみつきながら、目には大粒の涙をためて震えていた。

「ホントは、怖えんだろ？ 一体ナニがあっただよ？」

英二は、優しい表情を浮かべ、フェンス越しの拓巳に話しかける。

「……………」

しかし、拓巳はフェンスにしがみついて、小さな身体を震わすだけで、ずっと黙り込んでいた。

「あん時さあ、駅のホームで言っただじゃん。オレたち同じ高校の『トモダチ』じゃねーか。なんか辛い事でもあったんなら、聞いてや

るし、力になってやるぜ」

順平も、英二の横に並び、フェンス越しの拓巳に言葉をかける。

屋上は、心地の良い暖かな春の日差しで溢れていたが、フェンスを挟んだ三人の周りだけは、ピンと張り詰めた冷たい空気に包まれていた。

数分の沈黙のあと、口を開いたのは拓巳だった。

「……こないだ、駅のホームで助けてもらった事は、礼を言うよ」

「ああ……」

「だけど、勘違いしないでくれ。僕は、君たちの事を「トモダチ」だなんかとは思っていないから。君たちと僕とでは、生きている世界が違うんだ。だから、僕が、今、たとえ苦しみ悩んでいても、君たちが、僕を理解しようだなんて、そんなおこがましい事は言わないでくれ」

「……んだと、このヤロー!!」

自分たちを、まるで見下しているかのように話す拓巳の言葉に、短気な英二は、怒りを抑えられなくなり、拓巳がしがみついているフェンスを、力いっぱい蹴飛ばしてしまう。

拓巳の身体は、その勢いで大きく揺れ、足のつま先が、狭い足場からはみ出てしまい、下に落ちそうになった。思わず大きな悲鳴を上げた拓巳は、フェンスを掴んでいた手に思いつきり力を入れた。

「おいっ！ 英二、お前、勃起男を殺す気か？」

拓巳の言葉で、興奮した英二は、順平に身体を押さえつけられながらも、拓巳を睨みつけ大声を放つ。

「ナニが君たちと僕とでは住む世界が違うだと？ ああ！？ 見下したように、言ってんじゃねえぞ！ おんなじ十七歳の高校生だろうが！」

「……同じ高校生？ 馬鹿な事言うなよ。僕の偏差値がいくらあるか君はしってるのかい？ 君たちのような下等な人間と同じにしないでくれ」

「なんだと、コラア！！」

「だいたい、おかしいんだ。世の中は！ いつだってそう、僕のよう
に優秀な人間はいつも苦しまなきゃいけない。君たちのように、
何も考えず、ただ、ただらだと毎日を過ごしてる人間もいるという
のに、僕は……、僕は、ここで死ななきゃいけないなんて不条理す
ぎる……」

フェンスを両手で握り締め、うつむき呟くように話す拓巳の目か
らは、ぼたぼたと大粒の涙がこぼれていた。

「死ななきゃいけない……？ ナニ言っただよ。死ななきゃいけ
ない人間なんている訳ねえだろ……」

拓巳のひとつひとつの言葉の節々に、少し苛立ちも感じる英二だ
ったが、まるで世界中の悲しみを、その小さな身体に背負い込んで
いるような拓巳の姿に、英二は胸がいっぱいになり、無性に何か拓
巳の力になりたいくなった。

「君たちには理解できないかもしれないが、僕は死ななきやいけな
いんだ。偏差値が……偏差値がどんどん落ちてゆく僕に、生きてゆ
く価値などないんだ！ 僕ら進学希望の受験生たちは、常に偏差値
というものさしだけで計られ生きてゆく。つまりは、偏差値を上げ
ること意外に僕らの存在意義はないんだ。そこには、自分という人
間性もなにもない。ただ、数字だけの世界なんだ。むろん、今さら
個性や夢などと言っても、僕自身が偏差値でしか自分を表現する
ことや、他人を評価することができないんだけどね……。僕らはみ
んな『はだかの王様』さ。偏差値という服を脱ぎ捨てれば、そこ
には何も無いんだ。自分さえもね……。だから、だから偏差値とい
う服を失った僕は死ぬしかないんだ」

「ナニを馬鹿な事、言っただ。偏差値だけがすべてな事なんかあ
るもんか」

「最初に言っただろう。住む世界が違うんだ。僕が住む世界は、偏差
値だけがすべてなんだ」

英二は、拓巳のその言葉を理解することも、反論することもでき
なかった。

英二自身が、自分は何のために生きているのか、高校を卒業した
後、一体何をしたいかさえも分からなかったからだ。

むしろ、自殺まで考えるほど、目標に向かってまっすぐに突き進
もうとしている拓巳が羨ましくも思えた。

今の自分は、命をかけてまで何か熱中するものなどあるのだろ
うか？

英二の心の中には、いつも行き場のない虚無感が漂っていた。

「……それに、僕は、病気なんだ」

「……!!」

その言葉に、英二と順平は驚く。

「……イカないんだ。全く……」

「イカない……?」

英二と順平は、目を丸くして拓巳を見つめる。

「……つまりは、射精不全なんだ」

「射精不全　!?!」

「ああ、勃起はするが、その……、いくらシてもイカない……」

「……???」

突然の拓巳の告白に、英二と順平は言葉を失ってしまった。

しかし、そんな二人をよそに、拓巳はまるで、今まで心の中に溜め込んでいたものを吐き出すかのように、二人に話しはじめた。

「一ヶ月ほどくらい前だったんだ。自分の部屋で東大の過去問を解いている時にね、難問にさしかかり、どうしてもその……、オナニをたくなつたんだ。だけどね……、その時僕はシていたところを、母親に見つかってしまったんだ。それからなんだ……、何度シても、何度シてもイキそうになると、必ずあの時の母親の悲しげで冷たい

表情が浮かんでしまい、急にしぼんでしまうんだ。そうやってくと、もう僕の身体はどんどんおかしくなってくる。僕の精巣に溜まった精子たちは、きつと今の僕のように行き場を失ってしまっているんだろうね。早く排出を望み、陽のあたる場所へ出たがっているかのように、イカないのに、どんな些細な刺激でも、僕を勃起させてしまうようになったんだ……!!」

「……………」

「…………だから、僕はもう終わりなんだ。偏差値もさがり、身体も変な風になってしまった僕が、これからどう生きて行けばいいというんだ。…………でも、最後に、君たちに話を聞いてもらえてすっきりしたよ。ありがとう」

拓巳は、話を終えると、涙に濡れてくしゃくしゃになった顔を上げ、空を眺めた。

そして、何かを決意したかのように、少し頷くと、フェンスを掴んでいた両手を、そつと離そうとした。

「ちよつと待ったあ !!」

今まで、ずっと黙り込んでいたいた順平の声だった。

その声にびつくりした拓巳は、離そうとしていた両手で、またフェンスを力強く掴み、目を丸くして順平を見つめる。

「おいコラ！ 勃起男！ ナニが君たちに話を聞いてもらえたからすつきりしただ！？ すつきりしなきゃいけねえのは、お前のポコチンだろ!!」

「な、なななんだよ、急に君は？」

「お前、セックスした事あんの？」

順平は、腰をかがめ少し上目で、拓巳に笑いかける。

「……ないよ……」

「オレもないよ。だからさあ、お前、セックスもしねえで、死んでゆくなんてもつたいたくねえ？ セックスしに行こうぜ、オレらとよあ。そうすりゃ、お前のイカないビョウキつてのも、もしかしたら治るかもしれねえぜ！ だってよあ、セックスって、超気持ちいいらしいじゃん。オレらの右手の何百倍も気持ちいいんだってさあ！！」

順平は、驚き戸惑う拓巳の手を、フェンス越しにがっしりと握り締め、豪快に笑い出した。

いつだってそうさ

よく考えりゃあ

あの頃の俺たちに

出来る事って言ったら

オナニーくらいしかねえよ

だけどさあ

これからは

ぱあっと一緒に飛び立つんだ

独りでウジウジ考えんのはやめてさあ

みんなで一緒に探すんだ

俺たちが

これから生きていくための意味を！！

第5話 愛の消えた街（1）

< 1 >

「えーっと……、名前はさくらちゃん、年齢は二十歳かぁ。職業は事務……と。おい英二見てみるよ！ この女の子なかなか可愛いんじゃないのー!!」

順平、英二、拓巳の目の前には、華やかに並べられた、数枚の女の子のプロフィールカードが広がっていた。

名刺サイズのプロフィールカードには、それぞれの女の子の写真と、彼女たちの手書きによるプロフィール、そして様々なメッセージが綴られていた。

昼休みに、屋上から飛び降りようとしていた拓巳だったが、結局は、順平が言う『セックスする前に死ぬなんて馬鹿げている』という、極めて煩悩的でくだらない説得で、自殺を思い止まったのだ。

確かに、まだ経験のない十七歳の三人の少年たちには、『セックス』という言葉は、きわめて甘美的で、自分たちの心の奥底にある探求心をくすぐる魔法のような言葉だった。

彼らの頭の中は、いつも『セックス』という未知なるものへの好奇心でいっぱいだった。

< 2 >

「……で、順平、この女の子たちとホントにヤレんのか!？」

英二は、タバコに火を点つけた後、上を向いて、ふうっと大きく

息を吐いた。

「……ったりめくдар！ 雑誌に女の子のセックス体験談が出てたんだよ。『私はここで『運命の人』と出逢いました……』ってな」

順平は、腕を組み堂々と英二と拓巳に答えた。

三人は、学校が終わった後、一旦私服に着替えて、渋谷駅に集合した。そして、道玄坂の方へ向かい、ある雑居ビルに店を構えている『出逢いカフェ』に来ていたのだ。

三千円の入場料を払い店内に入ると、小綺麗に片付けられた店の中は、中央をパーティーションで仕切られて男性用の待合室と、女性用の待合室に分けられていた。

英二ら三人が案内された男性用の待合室の壁には、少し大きめなボードが掛けられており、そこには隣の部屋で待機している、数名の女の子たちのプロフィールカードが貼られていた。

英二らは、目の前に並べられた、出逢いを求める女の子たちのプロフィールや、パーティーションの磨りガラス越しに見える、女の子たちが動く様子に、好奇心を強く刺激され、先ほどから心臓の鼓動が早まるばかりであった。

「でもさあ、順平、ヤルんだったら、別にこんなところなんか来ず、ソープにでも行った方が早かったんじゃないかねえの？」

「馬鹿ヤロ。英二、お前、やつぱ『はじめて』はプロじゃイヤだろう！ オレは普通の女の子とセックスしたいんだ。それに……、ソープになんか行ったら一体いくらかかると思ってたんだよ。学生の

オレらにそんな金ある訳ねえだろ。ここなら、入場料の三千円、そして女の子と話すためのトークチケット二千円で、計五千円しかかかんねえんだぞー!!」

「俺たちのセックス料は五千円かあ……。なんか金出してセックスするなんて、しつくりこねえけどな……」

英二は、興奮状態で話す順平を横目に、ため息をつきながらタバコを灰皿に押し当てた。

「バーカ。セックス料じゃねえよ。オレら今からエンジンとかする訳じゃねえんだからよ。この五千円は、オレらにセックスを教えてくれる『運命の人』との出逢いのお見合い料さっ」

「運命の人かあ……」

英二は、プロフィールが並べられたボードから目を離し、そっと店内の窓に目をやった。

三階にあるその店の窓からは、渋谷の街を行き交う人混みが見えた。

「……ちくしょう！　なあ、あんたは一体どこにいてんだよ……」

目を細め、渋谷を行き交う人混みを眺める英二は、この間の朝の痴漢騒動で出逢った女性の瞳に感じた、儚いほどの寂しさを想い出していた。

「英二、こないだの女の事考えてるのか？」

窓際に佇む英二に、順平がゆっくり近づいた。

「オレはさあ、昔っからお前のダチだし、お前の恋ならいくらでも応援してやる。けどな、どこに住んでるのかも、一体何者なのかも、名前すら分かんねえ相手を、どうやってこの人混みで探すってんだよ」

「……………」

「諦めろ、英二。あの女を探すのは今日までって、オレと約束したじゃねえか。もう夕方だぜ。今日中に、もう一度あの女に出逢うなんて不可能だ。お前は、あの女を忘れるためにも、ここで新しい女を探して、新しい恋でもしろ！」

「……………なんだそりゃ」

英二は、自分を見つめて真剣に話す順平のその言葉にくすつと笑い、ふざけて尖らせた口を順平に向ける。

「なんだよ、英二。ほら、ふざけてねえで、どの女の子を誘うのか早く決めろよ。……つか勃起男、お前、なんでこんな所まで来て参考書なんか読んでんだ！ 参考書じゃなく、プロフィール読めよ！」

順平は、先ほどから少し冷めた様子の英二と、緊張でガチガチの拓巳の首に、ボクシングで鍛えられた太い腕を回し、プロフィールの貼られたボードに、二人の顔を力強く近づけた。

「いたたたたた。オイ、順平、お前え力入れすぎだっつーの！」

「ちょっ、ななな何するんだよ、いきなり君は！」

「うっせーこの虚弱体質共！ 早く女の子選んで口説きに行くぞ！」

狭い店内には、順平に首を締められ痛がる英二と拓巳の声と、順平の高らかな笑い声が、爽やかに響いた。

第6話 愛の消えた街（2）

< 1 >

「あなた……可愛いわね。ねえ、これから……何がしたい？」

少しでも動けば、二人の膝と膝が触れてしまうくらいの、狭く密着した部屋で、英二は隣に座る女性に見つめられていた。

グロスで艶やかに光を放つその女性の唇は、まだ女性を知らない英二を刺激した。ドキドキと高鳴る鼓動を抑えるのに精一杯な英二は、ただうつ向き、その女性と目を合わせる事もできずにいた。

先ほどの男性用の待合室で、なかなか女性を選ぼうとしない英二に対して、無理矢理に、順平が英二に指名させたのが、この「さくら」という二十歳の女性だった。

単に、この女性のプロフィールカードに、【エッチな友達募集】の記載があったからだ。

英二は、しぶしぶと男性用のプロフィールカードにペンを走らせ、受付で二千円のトークチケットを購入して、店内の奥にあるツーシヨットルームに案内された。

通常、男性は、この奥の部屋で、互いのプロフィールカードを交換して、店側に与えられた十分間という限られた時間をフル活用して、指名した女性をデートに連れ出そうと必死に口説く。

しかし、普段は順平と無鉄砲にバカ騒ぎしている英二も、身も知らずの初めて逢う女性と簡単に打ち解ける程、器用な男ではなかつ

た。

英二はうつ向き、テーブルに置かれた互いのプロフィールカードをただ見つめる事しかできなかった。

「緊張しているの……？ 本当に可愛いわね」

「……………ッ!？」

女性はくすつと笑ったかと思うと、隣に座る英二の膝に、すらりと伸びた指を伸ばし、小さく踊らせた。

そして……………

「……………ねえ、いいわよ、あなたとなら。これから、いい事しに行こうか」

狭く密着した異様な空間で、吐息にも似たささやくように響く女性の声を、英二は耳元に感じた。

< 2 >

「おば……………おば……………おばいが、おお大きいですね……………!!」

英二の隣にあるツーショットルームでは、顔を真っ赤にした興奮状態の順平が、緊張のあまりいつもよりオクターブの高い声を上げて、女性に喋りかけていた。

順平が選んだ女性は、二十八歳の人妻だった。プロフィールカードに記載されていた、Fカップというバストの大きさが、順平の決め手だった。

『初めては、やっぱり人妻のテクニクで昇天させてもらいましょう』

順平は、英二と拓巳に、鼻の下を伸ばしながら笑って、この女性を指名していた。

「……そっかなあ。私、やっぱりそんなに胸大きい!？」

「ひゃ……ひゃい! おおお大きいです!」

「ねえ、君も、胸が大きい女の子は好き？」

隣に座る女性を見下ろせば、背の高い順平からは、彼女の胸の谷間が非常によく見えた。

まるで大きな胸を強調するかのように、胸元が大きくあいたカットソーからは、その女性のブラジャーに飾られた鮮やかなレースが見え隠れして、それが順平をさらに興奮させていた。

幼い頃から、ずっと英二と一緒に遊んでいた順平だったが、乱暴者のくせに、どこか神経質でまっすぐなところを持つ英二とはまるで違い、その性格は、おおらかで、いつも短気で癪癪かんしゃくを起こす英二の面倒をよく見てきた。ある意味、英二よりも、何事に対しても順応力があった。しかし、昔からスケベな男で、今まで彼女がいた事もなかったのに、セックスや女性の身体についてを、英二がうんざりする程、いつも順平は語っていた。

「君……、いい身体してるね。何かスポーツでもしてるの？」

「……おあつ!」

女性は、ボクシングで鍛えられた順平の胸元を、嬉しそうに指で撫ではじめた。

< 3 >

順平の隣の、拓巳がいるツーショットルームでは、ずっと沈黙が続いていた。

拓巳は、自分の隣で、本を開き静かに読書が始める女性を、ドキドキと緊張しながら、見つめる事しかできなかった。

拓巳が選んだ女性は、

「幸子」という十八歳の学生だった。

カラーペンで可愛らしく彩られた他の女性たちのプロフィールカードとは違い、幸子のプロフィールカードは、繊細で綺麗な文字で作られていた。

まるで証明写真のように、まっすぐ正面を向いて真面目に映っている写真と、【友達募集】とだけ、淡白に書かれているプロフィールカードを見た順平は、

「そんな女とヤレル訳ねえ」と、拓巳が指名するのを反対したが、今どきつばくはない幸子の雰囲気惹かれ、拓巳は指名した。

「……………あっ!？」

拓巳が、緊張で固まった身体を少し動かした時、幸子のスカートから伸びる膝に、拓巳は自分の膝をぶつけてしまった。

ぴたりと密着した膝からは、ズボンの上からでも、幸子の身体の温もりが伝わってきて、拓巳の股間は膨れあがってしまっていた。

幸子にバレないように、拓巳は自分の鞆を、膨れ上がった股間に押しつけるが、それがさらに刺激となり、拓巳の顔は熱りはじめ、頭の中が真っ白になりはじめた。

「あなたも、セックスしたいんですか？」

突然、幸子は読んでいた本を閉じ、拓巳に口を開いた。

拓巳を睨みつけるように見つめる幸子の目は、どこか冷たく、悲しそうな目をしていた。

「男の人って、女性をただセックスするためだけでしか見てないでしょ」

「……えっ？」

「お姉ちゃん、今日はいくら欲しいの？ そんなセリフはもう聞き飽きた」

「……き…きみ？」

「こないだ来た時なんかは、数枚の一万円札をテーブルに広げられてね、これでいいだろうって、いきなり抱きしめてくる男性もいたわ」

「……君、ここに良く来てるの？」

思いもしなかった会話の流れに、冷静に戻った拓巳は、幸子に問いかけた。

「ええ、毎日来てる。家には帰りたくないから。母親がね、家でスナック経営してるの。あんな騒がしい場所で勉強なんかできないわ」

「

「……………」

「図書館は五時に閉まるでしょ。だから、その後は、いつもここに
来て勉強してるの。ここなら十一時までいれるし、女の子はフリー
ドリンクで、お菓子も自由に食べれるから、男の人と十分間話すの
だけ我慢すれば、私にとって都合のいい、勉強部屋なの」

「…………勉強！？ 君は、ここに勉強しに来てるの？」

「ええそうよ、だから私は、あなたとデートする気も、ましてやい
くらお金出されても、セックスする気なんかないから、それだけは
最初に言っとくわ」

幸子は、ため息まじりに拓巳に話した後、また本を開き読書を始
めた。

いや、よくよく拓巳が見てみると、それは文庫本ではなく、参考
書だった。

拓巳が、よくよく耳を澄ませば、幸子は呪文のように英文の例を音
読した後、それを和訳をして、次のページでそれが正しいかどうか
を確認していた。

一瞬、幸子が和訳につまり考え出した時だった。

「How come she changed her mind
？ それは、『何故彼女は考えを変えたか』だよ」

「…………え！？」

突然の拓巳の言葉に、幸子は驚き拓巳を見つめる。

「How come? は『何故?』って意味。確かに分かり難いよぬ。僕も、最初は戸惑った。ねえ、大学受験するんでしょ。何処の大学受けるの?」

幸子は、今までここで出逢った事がなかったような、拓巳爽やかに笑顔に、思わず笑顔がこぼれた。

そして、照れくさそうに、上目で拓巳に笑いかけた。

「……東大」

「僕と一緒に……」

窮屈で狭くろしい空間に、照れくさそうに笑いあう二人の声が静かに響いた。

第7話 愛の消えた街（3）

< 1 >

「……ねえ、あなたとなら、私は全然平気よ」

「……えっ!？」

さくらは、うつ向く英二の顔を、覗き込んで微笑みを浮かべた。

「私と、……したいんでしょ」

英二の膝の上を静かに踊っていた、すらりと伸びたさくらの指先は、英二の内腿に滑り込み、次第に上へと動いてゆく。

その指の動きで、英二は身体中の血液がドクドクと波打つを感じ、得体の知れない感覚が、英二の身体中を駆け巡った。

そして、さくらの指が英二の股の近くまで上がってきた時、英二はさくらに小さく頷いた。

「嬉しい……。あなたとなら、素敵な夜を過ごせそうだわ」

「……ああ」

「ねえ、交通費のところ、どれにもチェックされてなかったけど、どうする？ あなたなら一万円でいいわよ」

「……………!!」

交通費!？

英二は、自分が記入したプロフィールカードを見つめた。

すると確かに、『デートする際に、女の子にお渡しする交通費をチエックして下さい』と下の方に、三千円から様々な金額が書かれたチエック欄があったのだ。

「カネ取んのか……？」

「やだ……そんな怖い顔しないでよ。ただの交通費よ、交通費」

急に顔を上げて鋭い眼差しで英二に見つめられたさくらは、英二をからかうように微笑む。

「お店の人に聞かなかったの？　ここでは普通、女の子とデートする時には、必ず三千円以上の交通費を渡す決まりになってんのよ。……まあ、私は例えお茶するだけでも、五千円以上の交通費をもらわなきゃOKしないけどね」

さくらは、鞆からタバコを取り出すと、英二に笑いかけ、火を点けた。

「私、ここの常連の女の子の中では結構人気なのよ。だから、たった一時間のお茶するだけのデートでも、五千円以上は頂たく事になっているの」

上を向き、ふうっとタバコの煙を吐き出すさくらは、どこか男を小馬鹿にし、見下しているようで、英二は次第に怒りを覚え始めた。

「ねえ、どうする？　行こうよ！　私が、大人の関係を結ぶ時は、絶対五万円以上の交通費は貰うんだから。だけど、あなたとなら一

万円でいいって言ってるだよ」

「……………!!」

「……それとも、もしかして、私があなただの事を気に入ったとも思っ、タダでセックスができるとか期待してた？」

とても可愛らしいが、どこか心がなく作られたような笑顔を浮かべ話し続けるさくらに、英二は馬鹿にされているような気になり、拳を力いっぱい握りしめはじめた。

「あんたに払うカネなんてねえよ……………」

英二は、力いっぱい握りしめた拳を震わせながら、小さく呟いた。

「ははは……。残念ね、あなたの顔、結構タイプだし、まだ若いしあんまお金持っていないだろうと思ったから、超サービスしたつもりなのになあ」

さくらは、目を細め、英二の頬に手を添えた。

「俺に触んじゃねえ！」

ついに怒りが爆発した英二は、店内に響き渡るように、声を荒だてた。

「ナニ熱くなってるのよ……。馬鹿みたい。男も女も、しょせんお金じゃん。私たちは、お金が欲しい。そして男たちは、私たちとお茶をしたり、セックスしたいから、交通費という名のお金をちらつ

かせ、女を口説く。しかし女は、自分との出逢いを出来るだけ高く売ろうとする。出逢いなんて、結局はゲームなのよ。そこには、誰もが真剣に愛を求める姿なんてないわ。男にも……女にもね。あるのは男と女のただの駆け引きと　そしてお金だけ！！」

「……あんただけだろ。そんな事考えてんのは！」

「ははは、あなたってホントに、子供なのね。それとも、男のくせに、恋に恋する乙女ってとかな！？」

「なんだと　！」

英二は、握りしめた拳で、目の前のテーブルを思いっきり叩いた。店内中に響く英二の興奮した大きな声と、テーブルが叩かれた大きな音で、隣の部屋にいる順平や拓巳が心配そうに顔を出してきた。

「熱血坊やくん……。あなた、ここのお店に何人の女の子が登録してると思ってたんの？　……二千だよ。二千。つまり、この街のそれだの数の女の子が、男性との出逢いでお金を得ようとしてるって事。……分かった！？　それとも、あなた、お金が全てじゃない、だなんてそんな古ぼけたセリフでも言いたかった？」

さくらは、タバコを灰皿に押し当てた後、ヴィトンのバックを抱え、怒りに震える英二を残したまま部屋から出ていった。

「ちょ……待てよ！！」

「あたし……お金のない男に興味なんてないから」

さくらという女へなのか……？
それとも、自分が直面した現実へなのか……？

向かうべき所すら分からない英二の怒りが、じりじりと英二の心を締め付けた。

< 2 >

「うおおおおお！！」

順平と拓巳には何も告げないまま、怒りで店を飛び出した英二は、野獣の雄叫びにも似た声をあげ、雑居ビルの入り口にある出逢いカフェの看板に、握りしめた拳をぶつけた。

日が沈み暗くなった渋谷の街には、英二の心を嘲笑うかのように、色とりどりのネオンが輝きはじめていた。

そして、夜空からポツリポツリと降り出した雨は、次第に勢いをまし、容赦なく英二を打つけた。

髪をびしょびしょに濡らし、怒りに満ち溢れた表情で、肩ではあはあと息をしながら、英二は歩き続けた。

時折、渋谷の街を行き交う恋人たちが、英二とすれ違う度に、哀れむような眼差しで、英二を見つめ通り過ぎていった。

『男も女も、しょせんお金じゃん』

『それとも、あなた……お金が全てじゃない、だなんてそん古ぼけたセリフでも言いたかった』

英二の心に、先ほどのさくらが浮かべていた、心のない作り笑顔

が何度も蘇った。

「ちきしょお　っ！」

足元にあつた居酒屋の看板を、思いっきり蹴り上げた英二の頬には、ずぶ濡れの髪からしたたる雨に混じり、涙が流れていた。

真剣に誰かを

愛したかった……

そして真剣に誰かに

愛されたかった……

いつでも俺の望みは

ただそれだけさ

ただ

いつしかこの街は

出逢いを金で売る女たちと

女を金で口説く男たち

そんなヤツらにまみれた

愛が消えた街に

なっちまっちまったのかもな……

もしも

それが当たり前だと

言うんなら

そんな恋愛クソツタレだぜ

俺は……

俺は……

スクランブル交差点を渡り、ハチ公前に着いた英二は、まるで行き場を失った怒りを冷ますかのように、雨に濡れたアスファルトに大きく足を広げ座り込んだ。

見上げた夜空からは、シャワーを浴びているかのように、英二の顔に勢いよく雨が降り注がれる。その雨は、英二の心を惑わす怒りや、瞳に溢れる涙を洗い流してくれるようだった。

どのくらい雨に打たれていただろうか。雨でぼやけた英二の視界に、真っ赤な傘がゆっくり近づいてくるのが映った。

雨と涙に濡れた瞳のせいで、英二の視界に映る景色はぼやけていたが、なぜかその赤だけは、はっきりと力強く英二の視界に映るのだ。

次第に、自分に近づいてくるその赤が、英二の視界から消えた時、英二は、自分を打ちつけていた雨を急に感じなくなった。

「何してるの……？ こんなところで！？」

ふいに自分に話しかけてきた人影に、英二はゆっくりと目を向けた。

すると、そこには、始業式の朝以来、英二が一目惚れをして、ずっと探していた、あの女性が立っていた。

「あなたは……こないだの高校生でしょ」

驚く英二に、静かに笑顔を向けるその女性は、雨に打たれていた英二を、真っ赤な傘で優しく優しく包み込んでいた。

例えばこの街に
ホントに愛が
消えちまっただとしても
それはそれで
どうだっていいさ
だって
それでも俺は……
きっと信じてるから
彼女が手にする
この傘のようにさあ
真っ赤に輝く愛の光を

第7話 愛の消えた街（3）（後書き）

はじめまして。

あいぽです。

ここまで読んで下さった方、本当にありがとうございます。

ついに英二は、始業式の朝に一目惚れをした女性と再会を果たし、次回より、物語は色々動きはじめます！

皆様に楽しんで頂き、読んで良かったって言ってもらえるように、頑張りますので、次回から何卒ヨロシクお願いします。

あいぽ

第8話 t e e n a g e b l u e (1)

< 1 >

「あなたは……こないだの高校生でしょ」

英二は、自分に話しかける人影に、ゆっくりと目を向けた。すると、そこには、始業式の朝の痴漢騒動の時に、渋谷駅のホームで出逢った、二十歳くらいのあの女性が立っていた。

やっぱり、運命だったのか!?

英二は、自分の前に立っている、ずっと探し求めていた女性の顔を、雨でびしょびしょに濡れた顔で思わず見つめてしまう。

とても品良く化粧された、色白で整った顔立ち。

そこに美しく描かれた眉の形。

彼女が本来持つ大きな瞳を、さらに印象的に見せるように、ボリウムをつけたまつ毛。

肩の先で、ゆるく巻かれている、落ち着いたブラウン色した綺麗な髪。

少し胸元が開いた、黒のタイトなセータが引き立てる、すらりとした彼女のスタイルの良さ。

彼女を美しく包み込むかのように、肩にかけられたストール。

どれをとっても、今まで英二が学校の女子生徒たちには感じなかった、大人の女性を感じさせる魅力だった。

彼女は、まるで英二を包み込むかのように、真っ赤な傘を英二に

向けて立っていた。

「風邪ひくわよ……」

英二にそつと呟やく彼女の眼差しは、とても静かで優しい眼差しだった。

「ほつとけよ！ あんたの肩が濡れるだろ」

英二は、自分がとつさに出してしまった言葉が憎らしかった。

本当は、今、誰かに優しくされたかった。

本当は、今、誰かの心に自分の存在を映して欲しかった。

しかし、自分が出した言葉は、せつかく差し伸べてくれている手を……、今自分が一番望んでいた人からの手を、冷たく振り払うような口調であり、言葉だった。

あなたにもう一度逢いたかったんだ……

心の奥にある気持ちは、英二の口からは、まっすぐとは出てこなかった。

「……強がらなくてもいいのよ。あなた、本当は、今とても淋しい気持ちだったんでしょ。……まるで、雑踏の中に捨てられた、捨て猫みたいな顔してるわよ」

彼女は、アスファルトに座り込む英二の前に、そつとしゃがみ込み、優しく微笑んだ。

「なにがあつたか知らないけど、こんなに濡れちゃって……」

そして、バックからハンカチを取り出し、英二の顔を拭いてあげる。

「あなた、こないだ着てた制服は、南青山学院の生徒でしょ。何年生？」

「……三年」

「そう、じゃあ、受験生だね。こんなところで身体壊しちゃったら、大変よ」

「んな事、知ったこっちゃねーよ。それより、何で南青山ってわかるんだよ……？」

「……ふふふ、私も、南青山だから。あなたと一緒に。っていつても大学の方けどね。南青山学院大学の二年生」

ずっと探していた憧れの女性を前に、照れているのが、少し拗ねたような口調で話し続ける英二だった。

「……あつ、名前？」

「私の……？」

「……ああ」

「瞳、綾木瞳。^{アヤキヒトミ}あなたは？」

「赤木英二……」

「ふふ、英二くんって言うんだ……」

「なんだよ、人の名前呟いて笑うなよ」

ひとつの小さな傘の中で、互いの心に抱える淋しさを、まるで刹那にかき消し合うかのように、二人はそっと笑い合っていた。

埃っぽい街を打ちつける雨音は、どこか悲しいブルースの音色のように聞こえる夜だった。

< 2 >

『こないだ来た時なんかは、数枚の一万円札をテーブルに広げられてね、これでいいだろうって、いきなり抱きしめてくる男性もいたわ』

自分の部屋で、机に向う拓巳の頭には、出逢いカフェにいた幸子の言葉が、先程からずっと頭に残っていた。

英二が出逢いカフェを飛び出した後、拓巳も塾の時間になり、順平を置いて退出したのだが、塾で授業を受けている時も、塾が終わりに、自分の部屋で勉強している今も、ずっと幸子の言葉が頭に響いているのだ。

どうしようもなく落ち着かなくなり、勉強に集中できなくなった拓巳は、いつものように、机の引き出しの奥に隠してあるヌード写真集を見て、気晴らしをしようと、机の引き出しを開けた。

「……ない!？」

拓巳は、引き出しに入れてあった参考書や問題集を、全て部屋に撒き散らし、必死に引き出しの中を探すが、三冊入っていたお気に入りの写真集が一冊もないのだ。

「拓巳さん……、あなたが探しているものはコレかしら？」

ふと、自分と呼ぶ声に、拓巳は後ろを振り返ると、そこには、自分の母親が立っていた。

母親は、まるで拓巳に見せつけるかのように、拓巳が大切に隠していた、三冊のヌード写真集を手に使っていた。

「拓巳さん……、お母さんは前にも言っただわよね。こんなもの持つてるから、あなたの偏差値は下がってゆくのよ」

ヌード写真集を見つめる母親の目は、人間のものとは思えないような、冷たい目をしていた。

「お母さん、それはっ……」

母親にヌード写真集を見つけられた拓巳が、動揺を隠せず、思わず声を出した瞬間だった。

「けがらわしー!!」

なんと、拓巳の母親は、狂気に満ち溢れんばかりの鋭い眼差しで、そのヌード写真集をびりびりと、拓巳の目の前で破き始めたのだ。

「けがらわしいー!!」

母親の狂気に満ちた眼差しで、何度も何度も繰り返されるその言葉と、写真集が破かれる時の、びりびりという騒音にも似た音が、まるで拓巳を狂わせてゆくかのように部屋中に響き渡る。

うあああああ！

拓巳は、部屋に座り込み、唇をかみ締め、両手で両耳をふさぎ込み、心の中で悲鳴をあげる。

ヤメロ！ オマエハクデテイケ！

拓巳は心の中で、何度も何度も呟いた。

……しかし

「ごめんなさい。ごめんなさい」

出てくる言葉は、何故か母親への謝罪の言葉だった。
涙で溢れた目で、母親へ謝罪することしかできない拓巳だった。

「そうよ。それでいいのよ拓巳さん。あなたを惑わすものは、お母さんが全て取り払ってあげるから。あなたは、東大の受験の事だけ考えればいいの」

先程とはうって変わり、急に優しい眼差しに変わった母親は、部屋に座り込み、泣きじゃくる拓巳を、思いつきり抱きしめた。

「……お母さん、心配かけましたね。僕は、もう大丈夫ですから。必ず東大に合格するよう必死で勉強しますね」

母親の腕の中で、全く生気を感じさせないような目で、そう告げた拓巳は、急に立ち上がり、自分の机に戻り、てきぱきと問題集を解き始めた。

拓巳のその姿に、ほっと安堵のため息を漏らした拓巳の母親は、満面の笑みを浮かべ、静かに拓巳の部屋から出て行った。

母親が部屋から出て行った事を確認した拓巳は、解いていた問題集を閉じ、部屋の窓にそっと目を向ける。

窓を打つ雨音は、空虚な拓巳の心の中に、いつまでも虚しく響いていた。

『家には帰りたくないから……』

『……東大』

『僕と一緒にだ……』

窓をばおつと見つめていた拓巳の心に、先ほどの幸子との会話が、ふと、また思い出されてきた。

拓巳は、しばらく何かを考え込んだかと思うと、まるで何かに決意したかのように、拳を強く握り締め、窓を叩く雨を、鋭い眼差しで見つめ続けた。

第9話 t e e n a g e b l u e (2)

< 1 >

「お帰り。遅かったじゃねえか、順平」

順平が、ボクシングジムの扉を開くと、誰もいなくなったジムで、父親がリングサイドの周りを、タオルで丁寧に拭きあげていた。

『山下ボクシングジム』

元世界チャンプの順平の父親は、引退後、近所の中高生たちを集め、小さなボクシングジムを営んでいた。

順平が小学一年生の頃、一度だけ世界チャンプまで登りつめた父親だったが、その後の防衛戦で、すぐにタイトルは奪われてしまい、あとは惨敗に次ぐ惨敗で、チャピオンの座から、一気に転がり落ちた父親だった。

『ラッキーボーイ』

まるで、一発屋のようだった、情けない順平の父親を、当時のマスコミは、そう笑い飛ばしていた。

それにより、小学時代の順平は、学校で格好のイジメの対象になっていた。そして、それをいつも助けていたのが、英二だった。

「……まだ、いたのかよ」

順平は、ポケットに両手をつっ込み、斜に構えて、父親に小さく呟いた。

「……ああ。練習生たちが、怪我をしないように、手入れは重要だからな」

背中を丸めた父親は、まるでリングサイドに精一杯の愛情を注いでいるかのように、目を細め、ひと拭きひと拭き、丁寧に拭き上げていた。

「……いつまで続けんだよ。こんなところ」

「さあな……」

「近所の子供ら相手に、ボクシング教えて、そんなに楽しいのかよ」

「……まあな」

弱冠三十八歳にしては少し老いずきて、順平からは小さく見える父親に、順平は呆れたように言葉をかける。

しかし、父親は、そんな順平に対して、ただ背中を向け、寡黙に答えるだけだった。

「なあ……、親父、ボクシングって、そんな楽しいのかよ」

順平は、ジムの片隅に飾られた、チャンピオンベルトを肩にかけた父親の写真に、目を向けた。

「……お前は、キライなのか」

順平の言葉に過敏に反応した父親は、振り返り、順平を見つめる。

「オレは、オレは……、普通に大学に進学して、普通に就職してえよ」

「……………」

「何度言ったら分かる。順平、お前には、一流のセンスがあるんだ。なに、そんな夢のねえ事、言っただがんだ」

「……夢ねえ。夢で食っていけたら、誰も苦労しねえぜ」

順平は、床に転がっていたグローブを取り、トンとグローブを叩いた。

普通が一番だ

幼い頃より、ストイックに、ボクシングの世界で生きてきた父親を見て、順平は常々にそう思っていた。

一流企業で働らく父親を持つ、英二がいつも羨ましく、そして、そんな英二と友達である事が、順平にとっては小さな誇りだった。

「……来月、後樂園でプロテストがある。コミッションに申し込んでいたから、まずは早くプロになれ。オレみたく、歳をとってからじゃなく、お前は、若けえうちに、早くプロになるんだ。そして、多くの経験を重ねろ。順平、お前だったら、絶対え世界チャンプになれる男だ」

父親は掃除をする手を一旦休め、斜に構える順平の肩に、手を添えた。

「……っ、勝手な事してんじゃねえよ！」

順平は、父親の手を払うと、くるりと背を向け、ボクシングジムを飛びだした。

「順平　っ！　オレは……、オレは、絶対えお前と一緒に、もう一度、世界チャンピオンを掴むからなあ！！」

ジムを後にして、降りしきる雨の中を駆けてゆく順平の耳に、悲痛にも似た父親の声が聞こえてきた。

< 2 >

「なんで……、なんで俺になんか構ってんだよ……」

小さく広げられた真っ赤な傘の下で、英二は自分の前にしゃがみ込む瞳に、小さく呟いた。

「お礼よ。この間の」

「……お礼！？」

「そう、あの時の朝。私が痴漢されたと思って捕まえた男の子いたじゃん。私と、あの時の駅員さんは、あの子の言う事なんて、一切信じたりなんかしなかったわ。」

「……………」

「だけど、いきなり現れたあなた達は、事情も聞かないまま、あの子が言う事を信じた。ただ、盲目的にね。『トモダチ』だからって

ね」

「……………ああ」

「英二……………くんの、あの時の目、すごくまっすぐにキレイだった。なんか羨ましかったなあ。……………いつからか忘れちゃってた、あったかい気持ち……………あの時、思い出した気がしたわ。だから、お礼よ。私の心に、キレイな水を注いでくれたお礼」

英二に、そう話す瞳は、少し照れくさそうに笑っていた。

「なんだよそりゃ。いまのあなたが汚いみてえじゃん」

瞳の言葉に、思わずぷつと笑ってしまった英二は、はじめて瞳の目を見て話かけた。

「……………汚い？……………ふふ、そうかもね。あなたから見たら、私は汚い人間なのかもしれない。だけどね、生きてゆくには、しょうがないのよ。あの頃のままじゃいられない……………」

英二から視線をそらし、そう小さく呟やく瞳の目は、あの朝に英二が感じた、寂しさで溢れていた。

「……………なあ、あなたは、何でそんなに悲しい目をしてんだ？」

「……………え！？」

「はじめて、あなたと逢った朝、あなたは、とても寂しそうな眼差しをしていた。そして今も……………」

英二は、自分から視線をそらす瞳に、優しく語りかける。

「……私はもう、あの頃にはきつと戻れないから」

その時、英二には、遠くの人混みを見つめる瞳の目に、小さくこぼれそうな涙が見えた。

「……ごめんね。変な事言っちゃって。私……時間だから、もう行かなきゃ」

そつと英二に笑いかけた瞳は、手に持っていた真つ赤な傘を、英二の手に渡した。

一瞬、自分の手に瞳の暖かい手が触れ、英二は鼓動が早くなるのを感じた。

「……私、タクシー使うから、傘、持てきなよ」

呆然とする英二を横目に、瞳は立ち上がり、タクシー乗り場に急ごうとした。

「……なあ！！　ちよっ……待てよ」

思わず立ち上がった英二は、気がつけば、大きな声で瞳に呼びかけていた。

雨の中、消えてゆこうとしていた瞳が、英二のその声で、ゆつくりと後ろを振り返った時、降りしきる雨の中、二人の視線は静かに重なり合った。

「もう少しだ……。もう少し、傍にいてくれ」

「…………え!？」

英二は、立ち止まった瞳の前まで一步一步ゆっくり歩き、ジーンのポケットから、くしゃくしゃになった一本のタバコを取り出した。

そして、タバコに火をつけた英二は、精一杯の笑顔を浮かべ、瞳に語りかけた。

「一本だ……。なあ、この一本のタバコが燃え尽きるまで、一緒にいてくれないか？」

雨が降りしきる人混みの中、真つ赤な傘の下で、英二と瞳は、まるで霧のように漂うタバコの煙に紛れ、儚くも小さく光る灯火を、いつまでも静かに見つめ合っていた。

あの頃には
きつと戻れないから

彼女の言葉が
意味する事なんか
これっぽっちも
分からなかったさ

ただあの時の俺は
ゆっくりと
ゆっくりと
燃えてゆく
この一本の

タバコの先に

小さく光る灯火が

いつまでも

消えちまわないように

彼女と一緒に

眺めていたかっただけなんだ

第9話 t e e n a g e b l u e (2) (後書き)

こんばんは

あいぽです。

ようやく少しずつ物語は動き始めました。

様々な悩みを抱える三人の少年たちの葛藤は、いよいよ来週から、暴走に……！？

次週は新章

「Scrap Alley」
が始まります。

これからもヨロシクお願いします。

あいぽ

第10話 Scrap Alley(1)

「いやあ、もうすげえなのって、お前Fカップだぜ！ Fカップ！」

昨日までの大雨とは違って変わり、春の暖かい日差しが校舎の窓から差し込んでいた。

まっすぐと続く廊下を教室に向かう順平は、横に並んで歩く拓巳に、先ほどから少し興奮気味に話かけていた。

しかし、拓巳はというと、そんな順平に対して、ただ適当に相槌を打つだけで、常に視線は手元に開いた参考書にあった。

「それでさあ、オレの目の前でぶるんぶるん揺れる訳よ、Fカップが……！」

「……それで？」

「それでって、お前、彼女はさあ、オレの華麗な腰使いで言うんだ。『あつ、いやん、やめて……もっともっと』ってね」

順平は、両手で自分の体を抱きしめ、嬉しそうに女性の吐息を真似る。

「だ・か・ら……！！ 君は、朝っぱらから、そんな事を僕に言うために呼び止めたのかい？ いい加減にしてくれよ……！」

拓巳は手元の参考書をパタンと閉じ、おどける順平を直視して声を上げる。

いきなり怒り出す拓巳に、驚いた順平が呆然と絶句してしまった時だった。

「いよお！ 順平、今朝は悪いいな、先行っててもらって。ちょっと昨日寝つけなくて寝坊しちまったよ」

廊下の真ん中で対峙し合っていた順平と拓巳の真ん中に、英二が駆けてきて二人の肩に手を回した。

「……アレ！？ どうしたの二人でにらめっこなんかしちゃって」

英二は、笑いながら順平と拓巳の目を交互に見つめる。

「こ……この人が朝からつまらない事で僕を呼び止めるからだ！ 君の相棒も来たことだし、僕は勉強で忙しいからこれで失敬するよ。そんな低俗な話は、相棒くんにもしてくれ」

「な、なんだこのヤロー！！ お前、それでも昨日まで『僕は死ぬんだあゝ』って泣いてたヤツのセリフか？ お前つ、オレたちが来なければあ死んでただろう」

「まあまあ、順平も拓巳も落ち着けよ。何なんだよ、朝っぱらから……で、順平、お前朝から何の話を拓巳にしてたんだよ」

呆れたように二人を見つめた後、英二は順平に話しかけた。

「き……昨日の人妻と過ごしたオレの熱い夜の話だよ……」

英二に見つめられた順平は、目線を逸らし下を向き、少しどもりながら答える。

「あゝ！？ 順平、お前、昨日の夜ヤツたのか？」

「……………ああ」

英二は、順平の目をしばらく見つめた後、噴出すように笑い出した。

「順平、お前何が熱い夜だよ！ ホントはヤツてねえだろう！ お前がウソつくと右の眉が上げるからすぐ分かんだよ！ このウソつきが！」

英二は、順平の頭を思いっきり引つ叩いた。

すると、順平も「なんだと、このヤロー」とボクシングのフットワークをリズムカルに行い出す。いつものまにか、廊下では英二と順平のじゃれ合いがいつものように始まりだした。

「もゝ！ うるさいんだよ君たちは！ さつさと僕の前から姿を消してくれ！ 君がセックスしようが、セックスしまいが、僕には関係ないんだ。いちいちそんな事で、僕の勉強の時間を邪魔しないでくれ！！」

そんな英二と順平に、いよいよキレイな拓巳は、廊下中に響き渡るくらいの大きな声で叫んでしまう。

すると、廊下を歩いていた女子生徒たちは、拓巳の「セックス」という言葉に敏感に反応して、拓巳に思いっきり冷たい視線を投げ出した。

「き……………君たちはサイテーだ！！」

周りからの自分への視線を感じた拓巳は、みるみるうちに顔を真っ赤に染め出し英二と順平にそう呟くと廊下を走りだした。

「おいっ！　ちょっ待てよ」

突然廊下を走り出した拓巳に驚いた英二は、必死に追いかけて、拓巳の肩をつかみ真剣な表情で訴える。

「お前は……ヤツたのか？　あ、ほら変な意味じゃなくて、病気だよ。ヤツたら病気治るかもしねえって話してたから……」

「そ……そうだよ、オレもその話が聞きたくて、お前を呼び止めたんだよ」

英二と拓巳に、後から追いついた順平も真剣な眼差しで拓巳を見つめる。

しかし、拓巳は下を向き、ただ首を横にフルだけだった。

「……そっか」

その姿を見て、英二と順平のため息がもれる。

「君たち……、本気で僕を心配してくれてるのか？」

まるで自分の事のように、自分の病気を心配してくれている英二と順平の姿に、拓巳は嬉しくなったのか、さっきまでとは違って変わり、少し落ち着いた表情で英二と順平を見つめる。

「……ったりめえだろ！　言っただじゃん、俺たちは『トモダチ』だ

って」

「ホントに、信じていいのか……?」

「ああ、オレたちは絶対え裏切らねえ」

「そうさ、コイツのエロ話だけは信用できねえが、あとは何でも信じてくれよ」

英二は、順平の頭をもう一度思いつき叩いた後、拓巳に無邪気な笑顔を向ける。

「いつてえ、何すんだよ英二!」

「うつせえ! このエロ男」

またまた、英二と順平のじゃれ合いが始まるが、今度はそんな二人を、拓巳は微笑ましく思えて笑顔が浮かんでしまう。

母親から執拗なまでの干渉を受けながら、勉強漬けの毎日を通してきた拓巳は、今まで友達と呼べる者など周りにはいなかったし、他人とどのように付き合っただけがいいかなど分からなかった。

しかし、英二と順平を見て微笑む拓巳の笑顔は、まるで初めて誰かを受け入れたような、そんな心からの笑顔だった。

「なあ……、もし君たちの事を信じていいんなら、相談したいことがあるんだが、聞いてもらえるかい?」

「ああ、もちろんさ」

「じゃあ、今日の放課後に、中庭の芝生で待ち合わせしよう」

「……オツケー」

「……了解」

突然の拓巳の申し出に、一瞬は戸惑った英二と順平だったが、思いつめたように自分たちに訴えかける拓巳に、真剣な表情で快く返事をした。

あの頃の俺たちは

ただいつも信じていたんだ

社会のルールなんて分かんねえ俺たちが

出来る事っていったら

ダチを信じる事ぐれえしかできなかったからさ

この三人の友情が

この先一体どこに辿り着くかなんて

あの頃の俺たちには

全く分かりはしなかった

ただいつも

この「友情」だけは永遠だって

信じていたんだ

第11話 Scrap Alley(2)

< 1 >

「なあ英二？ 勃起男の相談って何だと思う？」

「さあな、秀才の考えてる事なんか、俺には分かんねえよ」

拓巳との約束通り、英二と順平は、放課後の校舎を中庭まで歩いていた。

拓巳の急な申し出をつけ、怪訝な顔をする順平に対し、英二は赤い傘を楽しそうに振り回しながら、にこやかに歩いていた。

「英二さあ……、朝から思ってたんだけど、お前、なんでこんな天気のいい日に、嬉しそうに傘なんか持ち歩いてんだ？」

「おっ？ これか？」

「おう、だってどう考えても、おかしいだろう。しかも真っ赤な傘なんて」

英二は、不思議そうに首をかしげる順平の横を急に駆け出して、順平に向かって、その傘を大きく広げた。

「愛だよ、愛！ どばあっと真っ赤に燃える愛の光さっ！」

そして、順平に向かいブイサインを突き出したかと思うと、
「ほら、順平早く行くぞ」と跳ねるように長い廊下を駆け出した。

「……っおい！ 英二、待てよ！ なんだよ愛って。お前まさか、こないだの女と再会したのか！」

「……さあね〜！」

「なんだよ、この色ボケ男！ 白状しねえとぶっ飛ばすぞ」

校舎の窓から差し込む日差しは、嬉しいそうに無邪気に駆けてゆく英二と、それを追いかける順平を、眩しいくらいに照らしていた。

< 2 >

「出逢いカフェの女を助けたい〜！？」

英二と順平の驚く声が、中庭の芝生を包んだ。

真剣に二人の目を見つめる拓巳は、眉間に皺を寄せ、英二と順平に話を続けた。

「このままだと、彼女の幼い心は、腐敗した大人たちの心なき言動や行動により、いつしか立ち直る事もできないくらい、傷つけられてゆくだろう。大人たちは、口を揃えて言う。勉強すれば、立派な人間になれる、そして誇り高き人生を歩めるってね。だけど、本当にそう思うかい？ もし、大人たちの言う事が正しいのなら、なぜ彼女はあんな所に閉じ込められなきゃならないんだ！ 娘を返りみない母親と、性にまみれた汚い大人たち！ 大人たちは偉くなんかない！ 社会で生きてゆく中で、自分が抱えてしまったストレスを、僕らにぶつけているだけなんだ！」

拓巳は、そう言い放った後も、肩ではあはあと息を切らし、興奮

さめやらぬ状態で二人を見つめる。

「……なあ、勃起男よ。全然言ってる意味は分かんが、ようは出逢いカフェにいたあの子に惚れたんで、あそこから連れだし、自分のものにしたいって事だろ。カッコつけずに、素直にそう言えいいじゃん」

順平は、興奮する拓巳の肩に腕を回し、呆れたように笑っていた。

「違う！ 惚れたとかではなく、僕が言いたい事は、もっと高尚な事なんだ。彼女の夢を……東大合格を叶えてやりたい。僕らは、一緒に東大に行くんだ。そして、大人たちから受けた全てのストレスをバネにして、東大で勉強を続け、この街を……イヤ、この社会を変えられるような大人になるだ！ これから僕らのあとに生まれてくる子供たちのためにも、僕らは絶対に東大へ行き、勉強しなければいけない！ 僕は……僕はやっと分かったんだ。僕が僕であるための価値が。僕が、僕が……勉強するのは、親のためではない！ 僕らが生きてゆくこれからの社会のためなんだ！」

「僕が僕である価値か……。なあ、順平、お前、自分の価値ってなんだと思う？」

「なんだよ急に、英二。オレはそのお……なんだ……？ えっと、よく分かんねえや」

「俺もだよ、順平。なんのために生まれてきたのかも、何のために生きてんのかさえも分かんねえや。……ははは、でもさあ、俺、最近気づいたんだ。自分が何の価値を持ってるのかも分からねえ人間だけど、例えば誰かの事を好きになった時、その人を愛しく思う気

持ちや、その人を大切にしたいって気持ちは、この世界中で俺だけのもんなんだ。俺だけの心に輝いてるもんなんだ。だからさあ、誰かを好きになって、その人の事を想う時、もしかしたら、それが俺だけにしかない、俺だけの価値なんじゃないかな、ってね」

英二は、昨夜の降りしきる雨の中、瞳と出逢い、瞳と話したひとつひとつの事を思い出しながら、優しい眼差しで順平に話していた。

「……なあ、拓巳が言ってるような難しい事は俺にも分からねえよ。だけど、コイツが見つけた価値ってのが、その子と一緒に東大に行く事なら、俺たちも手伝ってやるっぜ」

英二は、芝生に寝っ転がり、流れる雲を見つめて、静かに呟いた。

「……英二くん」

そんな英二に向かい、嬉しそうに拓巳は声を上げる。

「誰かを好きになったらね……」

そんな二人に対し、順平はというと、自嘲気味に一人複雑な笑みを浮かべ、英二に背を向け芝生に横になった。

英二も拓巳も、恋をして好き勝手に盛り上がりやがって。

順平は里美の事を思いながら、目を閉じる。

昔から順平が好きだったのは、クラスメイトの里美。しかし彼女がずっと想いを寄せてるのは親友の英二だった。そんな事くらい順平も分かっていた。

自分の恋が叶う訳なんかないって事も。

里美の恋を応援してやりたいが、英二の恋も応援してやりたい。

だけど……

俺だって里美が大好きだ。ちくしょう！

順平は、しばらく何か考えた後、目の前に広がる芝生をかきむしり、ぱあっと空に向かって投げつけた。

「わあゝったよ！ 英二、拓巳い。二人まとめて面倒見てやるよ！ そのカフェの女の子の連れ出し手伝ってやるから、ぐだぐだ難しい事なんか言わねえで、ちゃんと自分の気持ちぶつけてやれ！ それから、英二！ お前も拓巳に負けねえように、頑張んだぞ！！」

「順平くん！ ありがとう。……ありがとう」

「バーカ、言われねえでも、俺は彼女を幸せにするぜ」

順平のその言葉に、嬉しそうに順平に乗っかり声を上げる拓巳と、空を見つめる続ける英二がいた。

< 3 >

三人は、いったん自宅で私服に着替え、八チ公前に夜の九時の集合する事を約束して、中庭を解散した。

『じゃあ、俺はちよつくら彼女に傘返してくるぜ』

英二のその言葉で、一人で帰宅する事になった順平は、青山通りを渋谷駅へ向かい一人うつ向き歩いていた。

辺りは、眩しいくらいのオレンジ色をした夕日に照らされて、順平の影は長く長く映し出されていた。

「あれ、順平！ めっずらしい、英二と一緒にじゃないんだ」

ふと自分と呼ぶ声がしたので 顔を上げると、少し先を歩いていた里美が順平に気づいたのか、手を振り微笑んでいた。

「……ああ、里美ちゃん」

順平は力のない声で一旦返事をすると、また一人でうつ向き歩き続けた。

「コラ！ 順平、人が声かけてやってんのに、ナニ無視して先に行こうとしてんのよ！」

里美は、いつものようにふざけて、順平の背中に飛び付く。

「ねえ、英二は！？」

「知らねえよ」

順平は、ため息をつき、里美の手を振り払い、また歩き出す。

「なによ、どうした順平？ 暗い顔して。英二とケンカでもしたの？」

「……………」

「コラ！　だまってちゃ分かんないぞ、順平」

里美は、順平の前に周り込み、無邪気な笑顔で順平を見つめた。

「ね、ナニがあったんなら、里美ちゃんに言ってみな？　山下順平くん」

「……………ほっとけよ」

「何よ。今日の順平つまんない」

「……………俺だつて、……………俺だつて色々あんだよ！！」

里美の笑顔についに耐えられなくなった順平は、自分を心配する里美をよそに、思わず青山通りを走り出した。

次第に視界から遠くなる順平を見つめ、里美は大きな声で叫んだ。

「プロテスト……………。受けるんだつてね！　おじさんから聞いたよ！　ファイトだよ順平！」

その言葉に、一瞬順平は立ち止まり、里美を振り返った。

オレンジ色の夕日が眩しく、遠くの里美の姿は人影のようになっている。

そして、そんな里美を見つめていると、順平の目に涙が溢れてくる。

「なあ、里美ちゃん！ プロテスト……プロテスト合格したら……」

「……何？ 聞こえない！？」

「プロテスト合格したら、オレと付き合ってくれ！ オレ、ずっと前から、里美ちゃんが好きなんだ　　！！」

順平は、里美に叫ぶと、遠くに佇む里美を残し、オレンジ色の夕日に向かって思いっきり駆け出した。

第12話 Scrap Alley(3)

< 1 >

「英二……くん!?」

眩しいくらいのオレンジ色の夕日が、辺り一面に植えられた美しい木々の緑から差し込む南青山学院大学のキャンパスで、一日の講義が終わった瞳が、制服姿の英二の姿を見つけて驚いていた。

キャンパスを行き交う学生達の向こうに、真っ赤な傘を肩に掛け、はにかんだように微笑む英二が見えるのだ。

瞳は思わず英二に駆け寄り声をかける。

「……どうしたの?」

「ははっ、……これ、返さなきゃなと思って」

「わざわざ……? ふふっ、別に良かったのに」

どこか照れくさそうにする英二を見ると、何だか少し照れてしまっ瞳だった。

傘を瞳に渡した英二は、手持ち無沙汰になった両手を、ポケットに突っ込み、ぶっきらぼうに瞳に尋ねる。

「あ、……な、なあ大学って楽しいか?」

「……え?」

「……あ、ほら、俺、実はまだ進路決めてなかったからさあ。大学行くなってどんな感じなんかなあーなんか思っちゃったりなんかしてさあ」

「ふふつ、英二くん、まだ進路決めてなかったんだ。なんかやりたい事とかってないの？」

瞳は近くにあったベンチに腰を降ろして英二を見上げた。

「イヤ、やりたい事って言われてもさあ、ねえんだよなコレが。ちくしょう！　ったく、順平や拓海が羨ましくなるぜ！」

英二は自嘲気味に少し笑うと、足元の小石を蹴り転がし、オレンジ色の夕日を見上げた。

プロボクサーを目指す順平や、東大を目指す拓海と違い、英二ははっきりとした自分の将来が想像できず、卒業後の進路を決めてゆく周りを横目に、いつも苛立ちと不安を抱えていた。

「……なあ、あんたはなんで大学に進学したんだ？」

英二はベンチに腰かける瞳の正面にしゃがみ込み、瞳に尋ねた。

「……え！？　私……」

「……ああ。なんかやりたい事があったから？」

「……………」

しかし英二のその質問に、瞳は英二の目を反らし困惑したような複雑な表情を浮かべるだけだった。

「ん！？ どうした？」

「……………」

「あ、イヤ……。言いたかないなら言いけどさあ。みんななんで大
学って行くのかなあって思ってたさ」

「…………ごめん。私、もうバイト行かなきゃ」

「あつ、おい、ちよつ……………！！」

英二の質問にしばらく黙り込んでしまっていた瞳は、急に何かを
思い出したかのように立ち上がり、戸惑う英二を残し足早に歩きはじ
めた。

「あつ、オイ待てよ！ ……ごめん。俺なんかマズイ事言った？」

「……………」

「なあ、ちよつ、待ってくれよ」

必死に瞳を追いかける英二だが、まるで何かに取りつかれたよう
に、瞳はカツカツとヒールを鳴らし、無言のまま足早に歩いてゆく。

「ちよつ……………、おい、瞳イ ……！！」

何かなんだか分からなくなった英二は、キャンパスを行き交う人
混みに埋もれてゆく瞳の背中に思わず声を上げる。

英二のそのまっすぐに自分を呼ぶ声に、瞳は思わず一瞬足を止めてしまう。

そして……

ゆっくりとゆっくりと英二を振り返った。

無言のままただ英二を見つめる瞳。

その悲しげな表情に英二は瞳を見つめたまま、何も言えず動けなくなってしまう。

気がつけば、瞳の頬にゆっくりと涙が落ちてゆくのが英二には見えた。

「……好きな人がいたから。この大学に大好きな人がいたから……」

「…… え!？」

唇を噛み締め、震える声で必死に自分に何かを訴えかけようとする瞳を見ると英二も胸が苦しくなる。

「……高校の頃ずっと憧れていた先輩だった。同じ大学に進学すれば、先輩とずっとずっと一緒にいれると思っていた」

「……」

「……だけど、だけど、もう先輩はいない!!」

「…… !!」

「亡くなったの……。病気で……。大好きだったのに……。ここに進学できてやっと思いが通じて、ずっと一緒にいようって約束してくれたのに……！！」

「……瞳」

次第に感情が高ぶりはじめ、その眼差しがどんどん涙で溢れ返る瞳に、英二は駆け寄り両手を広げて必死に訴えかける。

「ごめん。……なあ、俺が悪かった。変な事聞いてホントごめん！だから、なあだから……」

「……愛してたのよ！ そう、私は彼を愛していた。……だけど、だけど私は彼に何もしてあげられなかった。病気で苦しむ彼の手を、ただずつと握っていてあげる事しかできなかった。……そのうち彼の手からは温もりが消えてゆき……」

「……瞳」

「ねえ、あなたに分かる！？ 大好きな人に、……愛している人に、何もしてあげられない苦しみが……！！」

彼女が背負っていた重さなんて……

あの頃の俺には

まだ分からなかった

彼女がどんなに辛い思いをしてきたか……

どんなに苦しい思いをしてきたか……

それを理解するには

あの頃の俺は

まだ若く子供過ぎたんだ

…… だけど

…… だけど

ただ俺は

その瞳の奥に抱える彼女悲しみを
いつか拭ってやりたかったんだ

< 2 >

「遅っせゝなあ、英二！ アイツ何やってんだよ。 ったくようっ！」

陽が沈み、華やかにネオンが煌めく渋谷駅の八チ公前では、目の
前のビルに掛けられた大きなスクリーンに目をやりながら、順平と
拓巳が英二が来るのを待っていた。

渋谷のスクランブルにある大きなスクリーンからは、先ほどから
様々なアーティストのミュージッククリップが映し出され、渋谷の
街を華やかに彩っていた。

「…… おっ、拓巳い、ほらアレ見てみるよ！」

順平に声をかけられた拓巳がスクリーンに目をやると、アーティ
ストたちのミュージッククリップの合間に、丸日食品のハンバーグ
のコマーシャルが流れ出していた。

『美味しい！ 安全！ 明日も食べた〜い！』

丸日ハンバーグの軽快なBGMにリズムを取りながら、順平は拓
巳に自慢げに話す。

「アレ、英二んとこの父ちゃん会社なんだぜ。 あゝみえてもさっ、

アイツん家は結構エリートなんだよなあ」

「へーっ、英二くんの父さんって丸日に勤めてんだ」

「ああ、偉いさんらしいぞ」

「……ウソ!？」

「ホント。まったく羨ましいと思ったらありやしないよな。オレんこの親父なんて、いまだに夢にしがみついてる貧乏ボクサーだぜ。……なあ、お前んとこの父ちゃんは？」

「……えっ!？ 僕の父は……」

僕が小学校の頃に失踪した……

その言葉に、先ほどまでおどけていた順平の表情が曇る。

「……っスマン。変な事聞いて……悪かったな」

「……いいよ。あんな人の話。別に父親ともなんとも思ってないし。ただ……」

「ん!？ ただ、どうしたんだ？」

「……なんかそれからだったかなあ。母親が急に僕に執着しはじめたのは」

拓巳は、拳を握りしめ、まるで怒りに満ち溢れんばかりの鋭い眼差しで何かを睨みつけるような表情を浮かべていた。

< 3 >

銀座方面へ走るタクシーの中では、瞳が外に流れゆく街の明かりをぼおつと眺めていた。

頭の中には、先ほどの英二とのやりとりが走馬灯のように流れる。

まっすぐに自分を呼ぶ英二の声。

まっすぐに自分を見つめる英二の眼差し。

どこか汚れない英二の姿に、思わず高ぶった感情をぶつけてしまった自分。

昨年の秋に愛する人を亡くしてから、感情というものを心の奥に鍵をかけてしまい込み、ただバイトに明け暮れ生きてきた自分が、あんな風に感情を剥き出しにしてしまうなんかは、自分自身が想像もつかない事だった。

そして……

今まで心に溜めていた感情を、英二に全て吐き出した事により、何故か心が少し楽になった気もしていた。

今でも心の底から亡くした彼を愛しているし、一生忘れられない人だと思っている。

……ただ

英二とはじめて出逢った渋谷駅のホーム。

何かに導かれるかのように再会した雨の日の八チ公前。
そして先ほどの夕暮れのキャンパス

何故か英二と逢う度に、自分の心に懐かしい感情が湧き上がってくる感覚があった。

「英二くんかぁ……。なんか不思議な子だな」

英二から返された真っ赤な傘を見つめ、瞳は小さく呟いた。

『……なあ。俺じゃダメか？ はら、沈んだ時とかさあ、ダチに電話したりとかしたら、何かすっとする時あるじゃん』

先ほど感情が抑えきれず涙が止まらなくなった自分に、困惑しながらも英二が渡してくれた紙キレを、瞳はバックから取り出す。

『……何もできないけどさあ、話聞いてやるくらいならできるから涙で溢れかえる自分の手を広げ、まるで自分を優しく包み込みかのように、英二が両手で自分の手を握りしめ渡してくれた紙キレだった。』

瞳は携帯電話を手にして、その紙キレに書かれた英二の番号をプッシュした。

「……もしもし」

タクシーの静な社内に、瞳が呟いく小さな声が響いた。

第13話 Scrap Alley(4)

< 1 >

「……つたく、英二のヤツどこほつつき歩いてんだ？」

約束の時間を過ぎてても、ハチ公前に現れない英二に対し、順平はジーンズのポケットから携帯を取り出し英二に電話をかけようとする。

「まさか、逃げ出したりなんかはしてないよね……」

そして、その横では少し不安げな表情を浮かべる拓巳がいた。

「バカヤロ、アイツにかぎって、んな事する訳ねーだろ！ アイツはオレのマブダチだ！」

「……マブダチ」

心の底から英二を信じ、信頼しているような順平の力の籠った声色に、拓巳はあっけにとられる。

受験という名の競争社会の中で、まわりの人間は全てライバルであり、誰かと心を分かち合う事など愚かな事だと信じてきた拓巳にとっては、順平と英二の二人にある強い心の絆が信じ難いものでもあり、また少し羨ましくも感じた。

そして、拓巳の心の中に、英二と順平の言葉が、自然と思い出されてゆく。

俺たちの『トモダチ』だからよう!!

初めて、英二と順平に出逢った渋谷駅のホーム。今まで、まったく交流もなかった自分を、同じ学校の生徒だという事だけで、信じなくて助けてくれた二人の言葉。

ああ!?! 見下してんじゃねえよ! 俺たち同じ十七歳の高校生じゃねえか!

自分の存在価値すら分からなくなり、死を決意しようとしていた校舎の屋上で、自分に対して必死に言葉を投げ掛けてくれた二人。

言っただじゃん、俺たちは『トモダチ』だって……

誰にも言えず独り悩んでいた自分の身体の事を、心底心配してくれた二人。

……『トモダチ』

……『トモダチ』

……『トモダチ』

気がつけば、拓巳は、今まで感じた事のないような暖かな光に、心が包まれてゆくような感覚を覚えてくる。

「ねえ、順平くん……。僕も、僕もその……。君たちと『マブダチ』になれるかな?」

拓巳は、自分より背の高い順平を、照れくさそうに見上げた。

「……つたりめーだろ」 順平は、ボクシングで鍛えられた太い腕を拓巳の首に巻きつけ、静かに笑った。

< 2 >

約束の時間を三十分以上は過ぎた頃だった。
息をきらしながら、英二が二人のもとに駆けてきた。

「……つすまねえ！ 遅くなっちまって、悪いい。ちよつくら、俺に今夜の事で作戦があつてね……」

「さ……作戦 ……!?」

突然の英二の言葉に、英二が遅れてきた事なんかはおかまいなしになり、順平と拓巳はまだ肩ではあはあと息をきらす英二の目を鋭く見つめた。

「ああ、作戦だ。だってよう、カフェの女の子を連れ出すつてもよう、お前らどうせ強引にカフェに乗り込み、強行突破する事か考えてねえだろ？」

「はははっ、違えねえよ。いざとなったら、オレの拳で邪魔するやつはぶつとばしてやるつもりだよ」

「……バカ、順平！ プロテスト前のお前に、ん危険な事させれるかよ。第一、例え俺たちが、その拓巳が言う女の子を強引に連れだした所で、その子の意思じゃねえ後でややこしい事になるに決まってるじゃねーか」

「何言つてんだよ、英二くん！ 彼女はあそこから出たいに決まっ

てるよ！！」

「……バカ、拓巳。カウパー出してんじゃないよ。それはお前の勝手な思い込みだろ。あくまでも、理想は彼女の意味で、あのカフエを出て、俺たちについて来てくれる事だろ」

英二は無邪気に笑いながら、拓巳の鼻を弾いた。

「じゃあ何だよ、英二。俺たちがまた金出してあのカフェに入って、あの子を説得して連れ出すって事か！？」

順平は、英二につっかかる。

「無理に決まってるだろ。拓巳の話を聞いた限りじゃあ、真面目そうな女の子で、見知らぬ男の言う事にはいはいについて行くような女の子じゃねえだろ」

「……………」

「じゃあ、どうすりや言いつてんだよ、英二？」

黙り込む拓巳と、これから何か楽しそうな事が起こりそうでたまらなく興奮気味の順平の目を、ゆっくりと見つめた後、英二は一呼吸おいてから、口を開いた。

「彼女に、その女の子を説得してもらっ」

英二は、静かに後ろを振り返り、先ほどから英二の後ろに立っていた、華奢な女性の右手を引き寄せ、順平と拓巳の前で紹介をした。

「綾木瞳さんだ……。彼女に、カフェに入ってもらい、あの女の子を説得して連れ出してきてもらう」

「あ……あなたは!!」

いきなりの瞳の登場に、順平と拓巳は目を丸くして驚きを隠せなかった。

瞳は、照れくさそうに自分から視線を反らす拓巳にそつと近づき、優しい笑顔を投げかけた。

「こないだはごめんなさいね。迷惑かけちゃって……。だからね、私にも、あなたの恋を応援させて」

「……………」

拓巳は顔を真っ赤にして小さく頷いた。

そして、その後ろでは、順平に向かい小さくVサインを投げかける英二と、それに応えるかのように微笑む順平がいた。

第14話 Scrap Alley(5)

< 1 >

拓巳が一目ぼれをした幸子という名の少女を、出会いカフェから連れ出すために、英二の提案とおり、瞳にカフェに潜入してもらい、その少女を説得してもらうという事にした三人と瞳は、いよいよ出会いかフェのある道玄坂の雑居ビルの前に着いた。

「……………着いたな」

「ああ……………」

英二と、順平は目を合わせ、大きく深呼吸をした。

ふと英二が、ビル入り口の横に視線を向けた時、その雑居ビルと隣のビルとの間に、出会いカフェの看板が倒れているのが見えた。

その看板の中央には、先日英二がそれを思いっきり殴った時にできたのであらう、少し大きな窪みができていた。

その窪みを見つけた英二は、おもむろにその看板の前にしゃがみこみ、その窪みをそつと右手で撫で始めた。

そして、英二はしばらく何かを考えていたかと思うと、思いつめたような険しい表情で立ち上がり、真っ暗に広がる渋谷の夜空を大きく見上げて呟いた。

「……………なあ、順平、拓巳。この街にもさあ、金で買えねえものってきつとあるよなあ？」

「何だよ、どうしたんだ英二？」

「英二く……ん？」

眉をしかめ、今にも泣き出しそうな表情で、星の見えない渋谷の夜空を見上げる英二の姿は、行き場所のない怒りと憂いにも似た悲しみに満ちていた。

そんな英二の様子に気づいた順平と拓巳は、まるで英二に優しく寄り添うかのように、ゆっくりと歩み寄り、英二の横で一緒に夜空を見上げて口を開いた。

「英二……、オレたちが信じていれば、きっとそれは見つける事ができるさ。オレはな……思うんだ。頭悪いから、世の中の事なんてちつともよく分かんねえけどさあ、世界中の大金持ちが集まったって買えねえくらい、金よりももっと価値があるものはきっとあるはずだって。そしてオレも、それを絶対見つけたいと思う、オマエらと一緒にな」

「うん、そうだね順平くん。僕たちなら、きっとそれを見つけれられる気がするよ。この街の夜空ってさあ、あまりにも汚れすぎていて星なんて全然見る事はできないでしょ。でもね、よく考えたら、この夜空の遥か彼方の宇宙では、幾千もの星たちが美しく輝やき続けているんだよ。……だから、だからね、僕たちさえ汚れていかなければ、他の誰も見えないものでも、きっと見る事ができるし、手に入れる事もできるんだ。このカフェに来るような、お金にまみれて汚れきった大人たちが、いくらお金を積んでも見る事すらできないものをね。そう、それは遠い宇宙で輝いている星たちのように、限りなく美しいものなんだ」

「……順平、拓巳、ありがとな。そうだな、一緒に見つけような。……金なんかいくら出しても手に入れる事が出来ねえようなさあ、俺たちだけの宝物を」

どこかセンチメンタルに、真っ暗な夜空を眺める三人の横を、春の暖かな夜風がそつと通りぬけていった。

「じゃあ、私、行ってくるね」

いつまでも感慨深げに夜空を眺めていた三人に、少々呆れながらも、瞳は優しく微笑み話しかけた。

瞳からすれば、英二ら三人は呆れるくらいに幼く感じるのだが、渋谷駅の朝のホームで初めて出会った時から、三人と一緒にいると、瞳は何故かいつも優しい気分になされていたのであった。

そして、英二と一緒にいるときに、瞳は特にそれを感じていた。

「……ああ、瞳、拓巳のためにホントに頼むな」

英二、順平、拓巳の必死な眼差しを受けた瞳は、三人の顔をしっかりと見つめて小さく頷いた後、雑居ビルの中に入っていた。

「誰かのためにかあ……」

雑居ビルの廊下を一人歩きながら、瞳は静かに呟き微笑んだ。

< 2 >

「……で、英二、オマエいつから彼女とこんな仲良しになっちゃったのよ」

瞳がビルに入って行った後、祈るようにカフェがある部屋の明かりを見上げている拓巳を横に、順平は先ほどからずっと気になっていた事を英二に問いかけた。

「いつから何も、放課後にさあ、大学まで傘を返しに行った時にな、彼女にケータイ教えたんだよ。そしたらさあ、お前らと集合するためにハチ公前に急いでた時に、なんと彼女から電話もらっちゃたんだよなあ、コレが！」

英二は、タバコに火を点けた後、フウツと大きく煙を吐き出すと、満面の笑みを順平に見せた。
そして、順平たちと合流する前に、突然かかってきた瞳からの電話を幸せそうに思い出し始めた。

< 3 >

『……もしもし 』

ハチ公前に急ぐ英二の携帯に、瞳から着信があったのは、ちょうど一時間ほど前だった。

「ひ……ひとみ？」

電話の向こう側の瞳の声が、あまりにも暗く沈んでいたいたので、英二は一語一語噛み締めるように瞳に呼びかけた。

「さっきはゴメン……。変な事聞いてほんとに悪かった」

『……………』

瞳の沈黙の隙間から、カーラジオが静かに流れる音が、英二の耳に聞こえてきた。

「……瞳？　今、移動中なのか？」

「……タクシーの中。バイト先に向かっているの」

「……そう」

トーンの低い瞳の声に、英二もいつしか声色が低くなっていた。

「……突然、電話、ごめんね。なんかね、今日のこと思い出してたら、あなたの声が聞きたくなっちゃって」

「……そう」

先ほどよりも少し明るくなった瞳の口調に、英二も優しく答える。

「あなたって不思議よね、あなたの前だと何故か懐かしい自分に戻れる気がする」

「懐かしい自分？」

「……うん、怒ったり、泣いたり、興奮したり。……そんな感情、彼が亡くなってから、もう自分にはないと思っていたわ」

「………」

「なんだろうなあ……、英二くんって……」

「ははっ、なんだろうって、別に普通の十七歳のガキだよ」

『ふふふ、何よそれ。自分で自分の事、ガキとか言っちゃてさ、バカみたい』

声のトーンが少しずつ明るくなってゆき、自分の話にも笑ってくれている瞳の様子に、英二はほっと一安心し、少し楽しくなってきた。

「あつ……、そうだそうだ、なあ、瞳」

『なに？』

「傘返しに行った時、相談しようと思ってたんだけどさあ、ちよつとお願い事を聞いてもらったりなんかしてもらえないかなあ〜なんて思ってたさ」

『……なによ、急に』

「え〜っと、その……、瞳って今夜空いてるか？　ってか、イヤ、ウソごめん。今、バイトに向かっているから、無理だよなあ……」

『なによ、独りでブツブツ言っていないで、ちゃんと言いなさい』

「実はさあ　……」

< 4 >

「へ〜、なんだよ英二？　それで、お前、勃起男の恋の相談したら、

すんなりと今夜引き受けてくれたってワケなのか？」

一通り話し終えた英二に向かって、順平は首をかしげて問いかけた。

「……ああ、何だか、どっちみち今夜はバイトに行きたくなかったから、ちょうど良かったっただってさ」

「へー……、なんか良く分かんねえけど、オマエはオマエで憧れの人と急接近できたし、これで勃起男が恋する女の子を連れ出すことも成功したら、オールオツケーだよな」

「……ああ、そうだな」

いつしか、英二と順平の二人も、拓巳と一緒に、雑居ビルのカフェがある部屋の明かりを真剣な眼差しで見上げていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8051d/>

十七歳の地図

2010年10月14日20時50分発行